
魔物と術師

竜気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔物と術師

【Nコード】

N5945X

【作者名】

竜気

【あらすじ】

これは私の別の作品とは、全く関係の無い物です。気楽に読んで頂けると嬉しいです。

魔物と術師の物語をどうぞ。

1話：日頃の日常を喜べ（前書き）

これはふと思いついて書いた物です。

更新もかなり不定期になると思いますが、頑張らさせていただきます。

なお、私は日本人とドイツ人のハーフで、日本に来て4年目という日本語も不安定な時期です。

誤字・脱字等があれば、遠慮なく注意して下さい。

では、1話、参りましょう。

1話：日頃の日常を喜べ

<Side グラムドリンク>

「暇だ・・・」

僕はグラムドリンク、通称‘リンク’、12歳。

銀髪銀眼の者だが、日頃の授業がつまらなすぎて、思わずため息を吐きながら窓の外を眺めていた。

さて、ここは‘アロنداイト’という名の世界。

この世界の裏側に、‘アンダーヴェルト’という魔物が住む世界が存在する。

・・・行つた事無いけど。

ま、それは良いとして・・・。

一応、僕達人間は魔物グラスタをこちらの世界に召喚出来たりする。

グラスタの召喚者を術師ソーサラーって言うんだ。

だからって特に何も無いけど、グラスタを使って犯罪を犯す奴ばかがいるんだよ、これが・・・。

まあ、召喚するには勉強して知識とか身につけなきゃ、無理なんだけど。

そういう勉強をするのは・・・10歳からだな、うん。

で、僕は3年目って訳。

5年間学んで、めでたく卒業ってとこかな。

1年習えば召喚だって出来るようになるし、その数も複数可能になってくる。

でも、召喚するには‘ガイスト精神力’が欠かせない。

そのガイストを使用する時は、人間誰しも‘ゴッター神力光’を身に纏う。

あ、オーラみたいな奴ね。

因みに僕のゴッターは銀色、よろしくつと・・・。

グラスタは複数召喚可能って言ったけど、5体も同時に召喚出来たら、それこそ天才だからね？

1体召喚するのに、もの凄い量のガイスト使うから。

今のところ、僕と契約を結んでいるグラスタは1体だけ。

結構高位の奴なんだからね、甘く見ないでもらいたい、うん。

・・・皆の平均2体だけど。

こ、この1体と契約するの、大変だったんだから！

うん、言い訳として受け取らないで欲しいな・・・。

「はい、注目！」

教卓に手を叩きつけて、教室内を静めるガトー先生。

何かな・・・？

「明日、毎年恒例のグラスト試験を行うっ！」

ふう・・・。

ガトー先生、今なんとおっしゃいました？

見れば、周りのクラスメイトも眼を点にして驚愕している。

「「「「「「「えええっ！？」「」「」「」「」

教室内に複数の声が重なって響いた。

ああ、そついやあの試験、この季節だっけか・・・。

はっはっは・・・。。。。忘れてた・・・。

僕は頬杖を突いたまま、苦笑する。

「面倒な・・・」

去年は一昨年を思い出し、額に手を当てて何とか逃れようと策を考

える。

仮病？

それとも怪我する？

・・・やめとこ、痛そうだしね。

では、先程の長つたらしい説明の後で申し訳ないけど、このグラス
タ試験の説明もさせてもらうよ。

ま、簡単に言えば次の学年への試験だ。

先生と生徒がグラスタを戦闘させて、クラス担任の先生が採点する。

あれ、緊張はするし闘わなくちゃいけないしで、かなり面倒なんだ
よねえ・・・。

・・・ま、いつか。

どうせ、いつかはやらなきゃいけない壁なんだ。

早めにやって終わらせた方が、良いって言えば良いかもしれない。

その試験なんだけど、特別の訓練室でやる。

訓練室って言うだけあって、壁や床、天井は強固な造りになってる
んだ。

イコール、本気OKって事ね・・・はは。

試験は自分のグラスタの中で、一番強い者で行うんだけど・・・僕に選択権は勿論無いね。

1体だし。

でも、僕はグラスタの強さを信じてるし、誰にも負けなと思うよ、うん。

「リンク、自信の程は？」

僕の前の席に座っている、フロッティが振りかえって声をかけてきた。

フロッティは紅い瞳に、輝く金髪。

結構熱血な少年、という言葉がぴったりだ。

「自信？聞くまでもないと思うけど・・・？」

「へっ、そうだったな」

フロッティは僕の言葉を聞き、口元を緩めて笑みを浮かべる。

フロッティは僕の幼馴染で、一番心を許せる親友だ。

幼馴染と言えばもう1人。

「あら？ずいぶんとした自信じゃない？」

僕の隣の席に座っていた女子、リアファルが顔を上げてこちらの表情を伺う。

何処までも碧い眼と、腰までもある紅い髪を揺らした。

僕達はリアと呼んでいる。

フロッティと同じく昔からの付き合いだ。

フロッティとリアファルは共に、グラスタを2体所有している。

「はは、まあね。そういうお2人さんは？」

僕が笑みを浮かべて問い返すと、如何やら愚問だったらしく、2人は余裕の笑顔だ。

「はいそこ、静かに！」

「へーい」

ガトー先生の注意を受け、フロッティが気の抜けた返事を返して前を向く。

「相変わらずだなあフロッティ。この鉄拳を食らえええっ！」

ガトー先生は両手の拳でフロッティの頭を挟み込み、力を加えながらねじっていった。

いわゆるグリグリ攻撃という奴。

「だあああつー！」

フロツティは堪らず椅子を蹴って席を立ち上がり、ガトー先生の拳を振り払う。

「フッフッフ、私に敵うと思っっているのかね？フロツティ君？」

いつもとは全く違う口調で、ガトー先生がフロツティに迫った。

日頃と変わらない光景に、皆が笑い声を漏らす。

まあフロツティってば、毎回毎回、ほぼ毎日のようにガトー先生と睨み合いを繰り返し、その戦況をクラスメイトが笑いを堪えながら見守るという、平凡な日々であった……。

家に帰ったのは、午後3時半頃。

「ただいま」

家の扉を開けても、返事は帰って来ない。

当然だ。

両親や僕の兄は、すでに他界している。

父親はグラスタを使った事件に巻き込まれて死亡し、母親はもとから心臓が弱かった。

兄は1年前、ふと家を出たまま帰って来ない。

警察にも言って捜索願いは出したけど、今じゃ僕だって諦めかけてる。

リビングのソファーに荷物を放り投げ、首にかけていた母の形見であるペンダントを握りしめた。

このペンダントは風呂に入る時以外、肌身離さず持ち歩いている。

それ以外の時、一度も手放した事は無かった。

『あなたはグラムドリンク。その名を、誇りに思いなさい』

昔、小さい頃、嫌と言う程何度も聞かされた母の言葉。

今では耳に染みつき、幻聴が聞こえる程だ。

この続きの言葉があったと思うんだけど、こっちの方が印象が強すぎてほとんど覚えていない。

何で誇りに思わなきゃいけないんだろ・・・？

ま、いいや。

とりあえず晩御飯。

朝多めに作っておいた物が残ってるから、それをテレビでも見ながら食べていく。

「ふう・・・ごちそうさまっと」

食器を水に付け、リビングでテレビを見ていた。

「明日かあ・・・試験・・・」

テレビの電源を切り、グデンツとソファーに寝転がって天井を見つめる。

「相手は誰かな・・・？とにかく、あの先生は嫌だなあ」

これまで2回の試験を受けている訳だから、ある程度試験の先生は分かっていた。

その中で、特に闘いに関して情熱を燃やす先生がいるのだ。

あの情熱論には付き合っていられない。

「『闘いこそが漢^{おとこ}の使命だ』とか、『心が不安定だぞ、少年よ。もっと強固な物でなくてはならん』とか・・・」

自分で言いながら、思わず苦笑してしまう。

いろいろ考えている間に、如何やら眠ってしまったらしい。

その後の記憶は無かった・・・。

—— チク・・・チク・・・

「う．．．」

時計の時を刻む秒針の音で、僕は眼を覚ました。

「ふあゝあ．．．。あ、いつの間にか寝てた。今は．．．って7時半!？」

遅れる！

と思うや否や体は動き出し、パンで手早く朝食を済ませる。

バッグを手に持ち玄関へ走り出したが、ふと大事な事を思い出してリビングに駆け戻った。

リビングのテレビの横の台に、写真立てがある。

僕が写真を撮った時のもので、両親と兄が写っていた。

「行ってきます!」

威勢良く声を張り上げ、ペンダントを写真に写る3人に見せた．．．。

「よお！リンク」

教室に入り、席に着くと同時にフロッティが拳を突き出してくる。

「おっはよ〜」

僕も拳で突き返し、朝の挨拶を済ませた。

荷物をまとめた頃に、リアファルも登校し自席に座る。

「おはよう、お2人さん」

「おはよう」

「よっ」

リアファルの挨拶に僕とフロッティがそれぞれ答え、何気ない1日が始まりを告げた。

「あなた、相変わらず髪が乱れてるわよ・・・？」

リアファルがフロッティの乱れ切った髪を見て、ポケットから櫛^{くし}を取り出す。

「はは、悪いな」

フロッティはそれを受け取り、ある程度整えた。

「サンキュ」

「どうも」

櫛を返したところで、ガラガラッと教室前の扉が開きガトー先生が入って来る。

が、

「あ．．．」

「お！」

「あら．．．」

僕達3人は次に起こった光景を見て、思わず声を漏らした。

扉の上に挟まっていた黒板消しが、ガトー先生の脳天にヒット。

チヨークの粉が舞い散る。

何とも古典的な仕掛けか．．．。

「だあれえだあ？こんな罷仕掛けた奴あ．．！」

それでもガトー先生の怒りゲージは、マックス頂点に。

「へっへ〜ん、昨日の仕返しだ！」

フロッティが胸を張って、舌を出した。

「フッフッフ．．．．．。やはりお前かああ！フロッティイイイツッ！！！」

ガトー先生は荷物を教卓に置いて身軽になると、フロッティ目掛けて猛ダッシュする。

「逃げよ・・・！」

フロツティも危険を察知したのか、教室から飛び出した。

「待ああてえええいつつ！！」

それに続いてガトー先生が教室の外へと、姿を消す。

「騒がしい朝ね・・・」

クラスメイトが爆笑している中、僕の隣で冷静に本を呼んでいたリアファルが、小さく呟いた。

この騒動により、試験開始が1時間程遅れた事を記しておく・・・。

<Side リアファル>

あの騒がしい朝を迎えたのは、今に始まった事ではないからまだ慣れてるけど、フロツティも飽きたりしないのかしらねえ・・・。

先生も先生で喧嘩っ早い性格・・・本当、読書に集中させて欲しいものね。

「あ、帰って来たよ」

リンクの声を聞き、本から視線を上げる。

フロッティは先生に持ち上げられ、動きを封じられた状態で帰って来た。

「哀れね・・・」

私が無表情で呟くと、それはひどいんじゃない？とリンクが苦笑しながら頬杖を突く。

フロッティは強引に席に座らされ、先生は教卓に戻った。

「何処を如何逃げ回ったの？」

リンクが面白そうに声をかける。

「まず東側の階段で1階に降りて、西側の階段使って3階に。んでまた東側の階段でここ、2階に降りてきて・・・西側の階段で捕まった。先生の奴、待ち伏せしてやがったんだぜ？」

まあ、そうでしょうね。

フロッティが策など無しに突き進むタイプという事を、一番よく知っているのだから・・・。

東、西、東とくれば西になるのは分かり切ってる事ね。

いい加減、それに気づいたら如何なのかしら・・・。

「何だよ・・・？」

私の視線に気づいたフロッティが、不満そうに声を低くする。

「フフ・・・別に」

まだ気づいていないこの少年を見て、私は笑みを浮かべた。

すると、先生が1つ咳払いして私達に注目の合図を出す。

私は本をしまい、視線を前へ向けた。

「え〜では、それぞれ相手をする先生を発表する」

先生は妙にかしこまった様子でチョークを手に、先生の名を上げていった。

次々と黒板に記されていく先生の名を見て、喜ぶ者もいれば落ち込む者まで様々。

私は普通の先生だったけど、フロッティはあの熱血先生のようなね。

リンクは冷静沈着な先生のように、2人共喜んでいるわ。

フロッティは熱血先生の方が嬉しいでしょうし、リンクは前からあの先生と一戦してみたかったようだし・・・。

まあ、結果は上々。

「後は戦闘。楽しんでいきましょうか・・・」

私は黒板に記された先生の名を見つめながら、口元に笑みを浮かべた・・・。

1話・日頃の日常を喜べ（後書き）

この調子で頑張りたいと思いますので、よろしくお願いします。

2話：大志を抱く少年よ（前書き）

2話、参りましょうか。

2話：大志を抱く少年よ

<Side フロツティ>

如何やら試験の一番手は俺らしい。

良いねえ、一番手！

燃えて来るってもんだ。

で、相手は毎年恒例の熱血先生であるブリューナク先生、通称ブナ
ン先生だ。

クラスメイトの皆やリンクも、あの熱血論が面倒って言うてるけど
な、俺は良いと思うぜ。

ブナン先生の言葉は闘志を燃やすからな。

これまで2回試験を受けてきたけど、ブナン先生とは当たらなかつ
たから待ってたんだよ。

俺達は訓練室に移動し、集まっていた先生のつまらん注意事項を聞
いていた。

あ、因みに俺のゴッターは紅色な。

よろしく。

「では注意事項は以上です」

試験担当の先生が説明を終えて、やっと試験が始まる。

「試験番号1番」

「はい！」

先生の声に、待ってましたと立ち上がって前へ進み出た。

ブナン先生と距離を置いて対峙すると、先生がおつと軽く驚いている。

「むむつ、君はフロツティ君ではないか！感動だ！私の論理を一番分かってくれる君と闘えるとは！」

「ブリューナク先生、感動は後で良いですから……」

感動しているブナン先生に、別の先生が苦笑いを浮かべながら先を促す。

「む、そうだったな。オッホン、では始めよう！」

ブナン先生は1つ咳払いして、気を引き締めた。

ああ言うところが面白いんだよなあ。

まあそれは良いとして……早速召喚しないとな！

こちらより1歩早く、ブナン先生が燃えるように紅いゴッターを身に纏う。

俺もあれくらい、紅いゴッターを出したいもんだぜ！

そんな事を思っていると、ブナン先生が詠唱を始めた。

詠唱する事によって、俺達ソーサラーはグラスタを呼び出す事が出来る。

「我が乞うは気高き獣。捕える獲物を薙ぎ払え！」

ブナン先生の紅いゴッターが集中し、渦を巻きながら巨大化した。

「^{ヴァー}
熊！」

先生の呼び出しと同時に、巨大な熊、ヴァーと呼ばれるグラスタが出現する。

そう、ブナン先生お気に入りのグラスタ。

くっ！

こいつと闘うのをどれだけ待っていた事か！

俺も召喚する為、紅いゴッターを身に纏う。

「我が乞うは紅き炎！立ち塞がる物を焼き払えっ！」

俺の頭上でゴッターが渦を巻き、巨大化すると全身を紅い毛で包む紅鳥が出現した。

「^{ローター}紅鳥ッ！」

俺のグラスタの中で、最強の奴だ。

『クク・・・！久しぶりに呼び出したと思えば、戦闘か。小僧』

ローターが闘える事を喜び、小さく笑う。

「おう！どんと行くぜ！」

「うむ！来い！」

俺とブナン先生は拳を握り締め、戦闘を開始した。

ヴァーが先手を打ち、宙に滞空するローター目掛けて走り出す。

『撃ち落としてやるぞ、紅鳥よ！』

「ゴオアアアアッ！」

ヴァーの声と咆哮が同時に響き、訓練室に木霊した。^{こだま}

『出来るといふならば、やってみよ！』

「ガアアアアアアッ！」

対してローターもやる気満々である。

ま、それはソーサラーも同じだけな・・・。

「ヴァーよ！叩き落せ！」

「ロター！翻弄してやれっ！」

俺とブナン先生が叫ぶように指示を出す。

ロターは訓練室内を飛び回り、ヴァーは叩き落そうと隙を狙って眼を凝らした。

ロターにこの訓練室は狭すぎたようで、所狭しと飛行している。

やべえ、ここが狭い事忘れてた・・・。

ってか訓練室ってもっと広くあるべきじゃねえの？

これでも学校内の教室じゃあ一番広いけど、ロターにとっちゃあ狭いよなあ。

天井壊して空へ・・・。

無理だな。

ここの壁は結構硬いつてリンクが言ってたし・・・それにロターはどちらかと言うと広い範囲に攻撃するタイプだし・・・。

しゃあねえ！

ここは根性で乗り切るか！

「炎！」

この広い部屋の中で俺の声が聞こえたのか、否、聞こえていなくて

もソーサリーとグラストは繋がっているから、何処にいても指示は聞こえる。

ローターは嘴を開き、灼熱の炎でヴァーの一带を焼き払った。

「ガオウ！」

ヴァーは炎が迫っていると知り、後方へジャンプして炎から逃れる。

ローターは爪に炎を纏わせ、ヴァーに襲いかかった。

よし、行け！

当たると確信した俺の目の前で、ヴァーはその体型からしてあり得ない素早さで爪をかわし、ローターに鋭利な爪を振りかざした。

「ガアアアアアッ!？」

地面に落とされるローター。

「取ったりいい！」

ブナン先生が拳を突き上げて喜ぶが、

「まだだぜえ！」

俺の声に反応して、ローターがムクリと体を起こし飛翔した。

「む、まだであつたか！」

『次こそは!』

「ゴアアアッ!」

ヴァーが飛び上がったロターを視線で追い、次の攻撃に構える。

「炎!」

「ガアッ!」

俺が合図する事を分かっていたかのように、ロターは炎を吐き出した。

炎はヴァーの視界を遮り、それを利用してロターが滑空する。

『焼け落ちよ!』

「ゴアアアッ!」

ロターが炎を盾に接近し、ヴァーの正面で紅蓮の炎を吐き出した。

「っしやあ!」

それを見て勝利を確信する俺だったが、

「がっはっは! 甘いぞ、少年よ!」

ブナン先生の笑い声にはっとなる。

「ロター!」

俺はすぐに腕を振るって指示を出し、ヴァーから離れるようロター

に伝えた。

一瞬遅かった……。

「ゴオオアアアッ!!」

その毛皮を焦がされても尚ヴァーは立ち上がり、爪でローターの左翼を斬り裂く。

紅い羽が数枚、宙を舞った。

——ズウンン……!

「ローター!?!」

紅鳥は静かに堕ち、アンダーヴェルトへと戻っていく。

グラスタが重傷を負った場合、強制的に向こうへ返されるのだ。

俺は消えかかっているローターに駆け寄り、嘴の部分に触れる。

「よく頑張った。休んでくれ」

『次の戦闘、楽しみにしておるぞ。小僧』

自分が怪我を負ったというのに、すでにその先を見ているローター。

俺は思わず小さく吹き出し、

「おう!!」

コンツと軽く嘴を突いて、笑顔で俺は返した。

ロターが完全にアンダーヴェルトへ帰った直後、ブナン先生のヴァーも消えていく。

「うむ。今回も熱い闘いであつた！」

『また呼ぶといい』

ヴァーは一言言い残し、向こうへ帰った。

ブナン先生が俺に歩みより、ガシツとその大きな手で俺の髪を滅茶苦茶にかきむしる。

「ああ！何すんですか！？」

俺は慌てて手で整え直し、こんな事をした訳を問いただした。

「フロツティ君、グラスタを信じ切った闘い、見事であつた！」

ブナン先生は喜びの涙を流しながら、俺を褒める。

・・・大げさだろ。

「うむ！また闘うのを楽しみにしておるぞ！少年よ、大志を抱けつ
！」

「あ、はい！」

ガシツと肩を掴まれたので、思わず元気に返事してしまった。

「がっはっは！」

高笑いしながら、ブナン先生が訓練室を出ていく。

な、何だったんだ今の言葉……。

<Side グラムドリンク>

「お疲れ」

僕達は訓練室の外で、窓越しに試験の様子を見学していた。

笑顔で退室してきたフロツティに、僕が声をかける。

「負けちまったけど、気分は良いぜ！」

ニカツと笑って見せるフロツティを、ガトー先生が満足そうに見ていた。

うんうんと、頷きながら名簿に採点していく。

僕はそれを横目で見ながら、フロツティは合格だなと悟った。

「試験番号2番！」

「はい！」

試験担当の先生に呼ばれ、クラスメイトの1人が相手の先生と共に
訓練室へ入る。

その後も試験は続き、クラスの大半が試験を終えた頃に昼食となっ
た。

僕とリアは最後の方に残ったようである。

早く終わらしたかったのに・・・。

「今日の給食も美味えなあ！」

皆が喜ぶ給食の時間。

周りのクラスメイトも楽しそうに会話していた。

僕の前の席で、フロッティがガツガツと食料を口に運んでいく。

「ゆっくりゆっくり」

それを見て、思わず声をかけてしまう。

「だいひょうぶ、はいひょうぶ！」

大丈夫、と言いたいようだが全く言えていない。

「食べながら口を開かない」

僕の隣で黙々と食べ進むリアが、冷静に注意してくれた。

フロッティはゴクンと吞み込んで、大丈夫だと自信あり気に繰り返す。

その自信は一体何処から……。

僕も給食を味わいながら食べていると、

「ッ!？」

急にフロッティが喉を詰まらせた。

「だから言っただのに……」

僕は席を立ち、フロッティの背中を叩く。

「っぷは！悪いリンク」

やっと喉を通り終えたらしく、呼吸を整えるフロッティに、僕はもう一度注意してから自席についた。

その後は特に事も無く、静かに給食が過ぎてくれた。

「えゝそれでは、午後の試験を始めます。試験番号15番!」

僕達は再び訓練室外の窓際に集まり、試験を再開している。

「はい」

試験担当の先生に呼ばれ、リアが立ちあがった。

「頑張つて」

僕は小さな声で応援すると、リアは静かに笑みを返し訓練室へと入っていく。

リアの相手はこの学校内でも珍しい、特に長短がある訳でもない普通の先生、ルーフェ先生だった。

いや、本当、この学校に碌な先生いないから・・・。

ある先生は熱血、ある先生はかなりの無口、ある先生は冷静すぎるからね。

あ、でもルーフェ先生はある意味すごいかも・・・。

<Side リアファル>

やっと私の試験。

ここまで待つのが大変だったわね・・・。

とりあえず、

「お手柔らかにお願いします」

私が試験相手のルーフェ先生にそう言うと、笑みを浮かべて返される。

「お手柔らかには出来ないわあ。これ、試験ですものねえ」

全体的に和ませる雰囲気を持っていて、よく生徒の仲裁役に選ばれる先生だ。

まあ、私もあの雰囲気には敵いそうにないけど。

「私のグラスタはこの子ですよ」

先生はニコリと笑って、水色のゴッターを身に纏う。

「我が乞うは碧き大海。その海に沈み礎いしずえとなれ」・・・」

ゴッターが渦を巻き、まるで水のように変化した。

その渦から碧い鱗を纏い、槍をその手に握った人魚が現れる。

「私のグラスタ、人魚ニクスですよ」

相変わらずの和やかな笑みを浮かべ、先生がグラスタの名を口にした。

「では・・・」

私も召喚する為、蒼いゴッターを身に纏う。

「我が乞^とうは永遠^{とわ}の冷氣。邪魔な物は縛りつけよ……」

私の正面でゴッターが渦巻き、白き虎が姿を現した。

「白虎^{ウェイブ}、寒気の走る冷氣をお願いね」

『はい』

私の言葉に、ウェイブは頷いてくれる。

ニクスが宙に浮き上がり槍を構えるのと同じく、ウェイブも腰を少し落とし、いつでも駆け出せる状態になった……。

2話：大志を抱く少年よ（後書き）

これから次回予告なんぞやってみる・・・。

渦巻く水、凍てつく氷。

その末に待つは満足か・・・後悔か。

3話・翔ける矢羽を食らえ（前書き）

3話、参りまゐす。

3話：翔ける矢羽を食らえ

<Side リアファル>

流石ね。

深き海の底を住みかとする人魚相手に、こちらが有利だと思い込んでいた私の不覚だわ……。

ニクスは槍を振るって、ウェイブを近づけさせない。

虎に槍は厳しいわね……。

私は武器を持つ相手に悩み、腕を組んで顎に手を当てる。

「……冷氣」

『承知しました』

私の一言がウェイブに届き、ウェイブの口が開かれ鋭利な歯が姿を現した。

白き虎の口から、その身を凍らす冷氣が放たれニクスを包む。

「あらあ、ニクス、大丈夫？」

『微妙ね』

ニクスは、槍が凍てついていくのを見届けながら苦い笑みを浮かべ

だが、相変わらずルーフェ先生の感情は穏やかだ。

・・・心配してるのかしら。

ウェイブは前脚の爪に冷気を纏わせ、ニクスの槍が凍ったのを確認すると、襲いかかる。

「オウッ！」

「っ・・・！」

ニクスは凍った槍で何とか受け止めるが、槍が壊れるのも時間の問題だ。

そう思っていた直後、槍にひびが入る。

「いけるわよ、ウェイブ」

「ガオアアッ！」

ウェイブが爪に纏う冷気の量を増やし、更に槍を凍らせて脆くした。

——バキインッ！

槍はついにその姿を保っていらなくなり、粉々に碎け散る。

「まあ・・・！」

それを見た先生が、口に手を当て驚いていた。

「ウェイブ、たたみかけて」

『了解です』

私の指示で、ウェイブはニクスの周りを走り回り、翻弄する。

槍を持たない人魚は、釣り人に誘われる魚と変わらない。

こちらの勝利は目前だった。

「甘いわよお、リアファルさん？」

ルーフェ先生がチツチツと指を振ってみせ、ニクスは余裕の笑みを浮かべる。

「さあニクス、新しい槍よ」

ルーフェ先生はゴッターを身に纏い、集束させて槍を作り上げた。

「ゴッター・・・！」

ゴッターを使用する事で武器を創生出来ると習ったが、あのように作り上げるとは・・・。

興味深いわね。

私はふと床を見つめ、策を考え直した。

——コンコンッ

私が靴で床を突くと、ウェイブが指示の意図を読み取り、床一面を凍らせていく。

「あらま・・・」

如何しよう、と床を見つめるルーフェ先生。

ウェイブは氷の床を滑り、ニクスに急接近。

「ッ!？」

振り抜かれた爪を咄嗟に槍で弾くニクスだが、ウェイブの前脚は1本だけではない。

左前脚の爪に冷気を纏わせ、ウェイブは槍を弾き飛ばした。

またすぐに武器を出されないよう休まず追撃を仕掛け、絶対零度の冷気が辺りを包み、ニクスの下半身が凍りついた。

「ニクス、無事ですか？」

『全然』

ニクスは氷を溶かす為、自分の体を水で包む。

水の温度を少し下げて、ほんの少しずつだが溶かしていった。

「縛りつけて・・・」

『はい』

私が小さく呟くと、ウェイブは水ごと冷氣で凍結させる。

「終わりです。・・・砕け」

私は右腕を振ってウェイブに合図すると、ウェイブは両足に冷氣を纏わせ氷を砕いた。

「ニクス・・・！」

ルーフエ先生は初めて、表情で分かる程驚いている。

ニクスはアンダーヴェルトに強制送還され、ルーフエ先生は一声かけた。

「ありがとうございます。休んで下さいね」

ニクスはニコリと笑みを浮かべ、向こうへ帰っていく。

「ウェイブ、上出来よ。良く頑張ったわ。ゆっくり休みなさい」

『これほどの傷、怪我にも入りません』

ウェイブは小さく頭を下げ、向こうへ帰った。

「リアファルさん、素晴らしい闘いでしたわあ。文句無しですねえ」

「ありがとうございます。先生も、お相手感謝します。ゴッターの使用方法も勉強になりました」

「あらあ、それは良かったわねえ」

ルーフェ先生はニコニコと笑い、頑張るのよと言い残して私と別れた。

<Side グラムドリンク>

「お疲れ、すごかったよ」

訓練室から出てきたリアに、僕は一言声をかける。

「どうも」

リアはニコリと笑い、僕と静かにハイタッチして交代の意を示した。

「試験番号、16番！」

クラスメイトのメンバーが続々と試験を終え、僕は最後の1人である。

早いうちに終わらしたかったんだけど、何で最後？

「試験番号、28番！」

「はい」

僕は担当先生のラハイグ先生と共に、訓練室に入った。

ラハイグ先生は学校一冷静で無口な先生で、いつも本を持ち歩いている。

先程までもずっと本を読んでいたのだ。

僕と向かい合つて、やっとパタンツと本を閉じ脇に抱える先生。

「では、参ります・・・」

先生は緑のゴッターを纏い、詠唱を始める。

「我が乞うは剣の刃・・・翔ける天を斬り裂け」・・・」

緑のゴッターが先生の頭上で渦を巻き、巨大化した。

「アドラー驚・・・」

『出番ですか・・・？』

薄緑色の羽を持つ、立派な驚が姿を現す。

来た・・・！

ずっと闘いたかった相手・・・。

僕は全身に白銀のゴッターを纏い、詠唱を開始した。

「我が乞うは疾風の翼。その翼^も以て天を翔けよ」・・・！」

『主、呼んだか・・・？』

僕の頭上に、白銀の巨鳥が姿を現す。

ヴォーゲル

「古鳥・・・！」

ヴォーゲルの尾羽は長く、風で揺らめき白銀に輝いていた。

「行きます！」

僕が試験開始の言葉を告げると、ヴォーゲルとアドラーが翼を広げて飛び立つ。

——ゴゴゴ・・・！

すると、流石に巨鳥2体では狭すぎると感じた先生が、天上を開けてくれた。

「頼みましたよ・・・」

ラハイグ先生は、舞い上がったアドラーを見届け、再び本を読み始める。

まあ、採点は他の先生がしてくれる訳だから、別に戦闘を見ていなくても良いんだけど・・・。

「ガアア・・・」

「ゴアア・・・」

ヴォーゲルとアドラーがある程度上昇して所で、お互い睨みあうよ

うに対峙した。

——ビュウウ・・・！

風が吹き荒れ、ヴォーゲルが先に動き出す。

アドラーもその後を追い、2体は螺旋を描くように飛翔した。

ヴォーゲルはその身に風を纏い、尾羽に小規模の竜巻を巻かせる。

風の古鳥、ヴォーゲル。

高位のグラスタで、契約するのに苦労したんだ。

でも、ちよつとした理由もあつて、ヴォーゲルは僕を気に入ってる
みたいなんだけどね・・・。

『我が主に、恥をかかせる訳にはいかぬ。勝たせてもらうぞ』
「ゴアアアアアッ！」

ヴォーゲルは両翼を大きく羽ばたかせ、羽を刃として複数放つ。

『そういう訳にもいきません。こちらとて、同じ思いです』

アドラーはヒラリヒラリと矢羽を避け、ヴォーゲルに接近した。

そこへ、竜巻を纏ったヴォーゲルの尾羽が直撃し、アドラーが態勢
を崩す。

「ゴアッ！」

ヴォーゲルを嘴を開き、天災に匹敵する竜巻を放ってアドラーに追撃を仕掛けた。

「ガアア・・・」

アドラーはそれをともに食らい、力無く訓練室目がけて落下を開始する。

——ブワアンッ！

だが、床に直撃する寸前でアドラーは態勢を立て直し、フワリと降り立った。

アドラーの羽は竜巻によって少々乱れているが、何事も無かったかのように舞い上がる。

「・・・」

僕はヴォーゲルが大きな怪我を負わない事を願い、手に力を込めた。

——ブウンッ！

アドラーはヴォーゲルを通り過ぎた所で、振り返り急降下を始める。

鋭い爪で、ヴォーゲルの左翼を斬り裂いた。

「ヴォーゲル・・・！」

天を白銀の羽が舞い、落ちて来るヴォーゲルを僕は啞然と見ていた。

その身に纏う竜巻が風の流れを作り、ヴォーゲルを一瞬で天へと運ぶ。

速い。

――ザシュッ・・・！

「ゴアアアアッ！？」

アドラーの左翼が斬り裂かれた。

『これで対等だ』

ヴォーゲルは落下するアドラーを追い、近くまで来ると更に追撃を仕掛ける。

竜巻が、唸りを上げてアドラーを包み込んだ。

「ガアアアアアッ！」

――ズドオンッ！

アドラーは竜巻を食らいながら、訓練室の床に激突する。

室内は風が吹き荒れ、震動が駆け巡った。

――パタンッ

ラハイグ先生が本を閉じ、強制送還されるアドラーに歩みよる。

「よく頑張りました……。きちんと見ていましたよ……」

先生も本を読みながら、戦況は把握していたらしい。

『すいません。お力になれませんでした』

アドラーの一言に、先生は首を横に振って見送った。

ヴォーゲルが傷ついた左翼を痛めながら、何とか降りて来る。

「ありがとう、大丈夫？ ゆっくり休んで」

『承知した。いつでも呼ぶといい。我が主よ』

ヴォーゲルはアンダーヴェルトに消え、ラハイグ先生が僕に歩み寄って来た。

「良く出来ていました……。素晴らしかったですよ……」

小さく呟き、口元に優しい笑みを浮かべながら、訓練室を出ていかれた。

「試験合格者を発表する！」

僕は教室に戻り、教卓の所で先生が名簿の紙と向き合っていた。

周りの皆は息を呑み、次の言葉を待つ。

「合格者は・・・」

先生の声が妙に響いて、この静寂が苦しかった。

早く解放されたいと思いますが、次の言葉を待つ。

「全員合格うつ！！」

[illegible]

教室内に複数の声が響き合った。

「イェイ！」

「やつたね」

僕とフロッティは拳をぶつけ合って、笑みを浮かべる。

「合格、か」

リアも小さく笑みを浮かべ、読書を始めた。

「つとて訳で、明日は祝全員合格イベントをするぞおつ！」

先生が黒板に「祝全員合格イベント」と書き記し、大きく赤いチョークで線を引いて囲んだ

「おお！先生もたまには良い事考えるな！た・ま・に・は！」

「フロッティイッ！イベントが中止になっても良いのかぁ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・すいませんでした！」

先生の言葉にフロッティが硬直し、敬礼して謝罪する。

教室内の笑い声が飛び交い、先生がイベント内容を黒板に書いていった。

「これだぁっ！」

チョークが砕ける程の勢いで、先生がビシッと指差した。

・・・・・・・・はい？

黒板には「短期旅行」と記されており、クラスメイトの歓声が沸き起こる。

「先生！」

僕は冷静に考え、挙手した。

「リンクか、何だ？」

「旅行費は・・・」

ただそれを心配して聞いてみると、先生は俯いて不気味に笑う。

「フッフッフ、先生が考えていないとも思ってたかぁ！1週間前、

集金があつただろう！」

あつ、と皆が口を開き啞然とした。

あの理由不明な集金は、これの為だったのか・・・。

つて事は、全員が合格してなくても行くつもりだったって事、だよ
ね。

「先生、準備良い！」

フロッティが、席を立ち上がってナイス！とサムズアップした。

「はっはっは！」

先生は高笑いし、クラス皆明日の事について楽しく話し合っている。

「それでは、各自明日の準備をしておくように！準備物はこのプリントに書いてある！」

先生はバシッと手に持つプリントを叩き、皆に配っていった。

短期旅行かあ・・・。

皆と旅行なんて初めてだ。

僕は明日を楽しみに、家へと帰宅した・・・。

3話：翔ける矢羽を食らえ（後書き）

静かなる自然に、騒がしい太陽が顔を出す。

術師は誰もが、それを望んでいなかった・・・。

4話：短期旅行の楽しみ（前書き）

4話、参ります。

4話：短期旅行の楽しみ

<Side グラムドリンク>

僕は意気揚々と家に帰り、プリントを見ながら明日の準備を進める。

旅行は2泊3日らしくって、荷物はなかなかの量になった。

準備が終わり、晩御飯を簡単に作ってニュースを見ながら食べる。

「・・・銀行強盗、か」

テレビに大きく映っているその様子を見て、小さく呟いてみた。

強盗団は、今だ逃走中だとか・・・。

「早く捕まえて欲しいなあ・・・」

食器を洗いながらそんな事を思っていると、次のニュースに変わる。

<Side リアファル>

私は一度帰宅し、また家を出ていた。

今日は週1回行われる弓道の日だ。

紅い髪を1つに結わえ、矢をつがえて弦を引き絞る。

町の体育館で15本程矢を射た後、私は先生のもとへ向かった。

「先生」

「ん？」

「今日、急に学校で短期旅行が決まって準備などがありますから、帰ってもよろしいですか？」

「旅行か、良いぞ」

私は先生に一礼し、荷物をまとめて帰宅した。

「あら、おかえり。早いね」

家に帰ると母が珍しい、と呟いている。

「ええ、明日旅行だから」

「・・・そうなの？」

「今日、急に決まったのよ。全く、こちらの事情も考えて欲しいもの・・・」

私は文句を言いながら、明日の準備に取り掛かる。

「ああ、そうは言いながらも顔に嬉しいって書いてあるわよ・・・」

？」

私は荷物をまとめ、2階に上がろうと階段に足をかけた。

「幻じゃない？」

母に小さな笑みを返し、そのまま2階に上がる。

背後で、母の微笑みを見たような気がした・・・。

<Side グラムドリンク>

午前5時半。

「・・・」

気が付くと朝を迎え、僕は天井を見上げていた。

ノソリと起き上がり、顔を洗う為に洗面台へ向かう。

冷たい水を顔にかけて、やっと眼を覚ましスッキリした。

「おはよう」

リビングに行ってテレビを付け、写真の3人に軽く声をかける。

『早いね・・・』

僕が小さい頃、早く起きた時に母がよく褒めてくれた。

優しい微笑みを浮かべて……。

って早く朝御飯！

僕はボクッとしていた事に気づき、急いで済ませる。

「よいつしよ……」

荷物を背負い、ペンダントを確認した。

「2日空けるけど、絶対帰ってくるから……。行ってきます！」

僕は3人に満面の笑顔を向け、朝日を迎えながら家を出る。

午前6時の事……。

「よお……リンク……」

朝早く学校に集合したクラスメイトの中で、唯一眼が覚め切れていないフロッティ。

「お、おはよう。眠そうだね」

「今日の事が気になって眠れなかった……」

フロッティは荷物を肩に、眼をこする。

「太陽の声でも聞きなさい。すぐに湖面ねむりから上がれるわよ?」

リアはフロツティの頭を掴み、無理矢理太陽に向かせた。

「うお、眩し!」

「・・・起きた?」

顔を手でかばうフロツティに、僕が声をかけてみる。

「お、おう。リアのおかげで何とか・・・」

フロツティはフルフルと頭を振って、視界のチラつきを消した。

リアもそれが分かると小さな本を右手に、左肩に荷物を背負い、クラス専用のバスへ乗り込む。

・・・本読んでたら、酔うよ?

僕とフロツティもバスに乗り、リアと通路を挟んだ反対側の席に座った。

僕とリアが通路側、フロツティは僕の隣で窓側。

「全員乗ったか?」

先生が一番前に座り確認の声を飛ばすと、元気な声が周囲から沸いた。

その声を確認した運転手が、バスを発進させる。

「先生、何かしましょうよ」

クラスメイトの1人が退屈そうに足をバタバタさせ、先生に遊びを促した。

「フッフッフ、そう言うと思ってな、こんな物を用意した」

先生は何処からか、スケッチブックをマジックペンを取り出す。

・・・？

皆の頭上にクエスチョンマークが浮いたが、リアはクスツと笑いパタリと本を閉じた。

分かったのかな・・・？

「む、リアファルは分かったようだぞ。これで何をするのかという
と、‘絵しりとり’だ！」

せ、先生って微妙なところ突くよなあ・・・。

「絵ええ！？」

「ええええ！？」

「何故に絵！？」

クラスメイトからダジャレの混ざった声が響き、僕は少し苦笑する。

「それじゃ、回していくぞ」

先生は1枚目に何かを描き、後ろの生徒に回した。

絵しりとりスタート。

「何これ・・・？」

と思ったが、早速止まってしまふ。

「先生上手いだろ！？なあ！」

生徒の呟きに先生がつつこけ、思わず確認するが首を横に振られてしまい、ガン・・・と落ち込む。

「これで良いのかな？」

生徒も不安を残し、次の人へ回した。

その後は止まる事も無く、リアまで辿り着く。

あ、因みにフロッティが最後で・・・次僕じゃん。

「・・・」

リアは回された絵を見て、マジックペンを使いサラサラを何かを描いていく。

それを隣で見ていた女の子が、すごい！と声を上げた。

・・・何だろ。

リアは小さく笑みを浮かべ、僕にスケッチブックを渡すと再び本を読み始めた。

僕はそれを横目で見ながら、描かれた絵を見て驚愕する。

「すご・・・」

「うお、これ分からねえ方が凄いいんじゃないか!？」

フロッティはリアが描いた‘木’を見ながら、すげえなと感心した。

恐らく‘き’で回って来た為、リアは‘木’を描いたのだろうか・・・。

リアひどいなあ。

また‘き’で回すなんてえ・・・。

その直後、僕の頭上で電球が灯った。

「フロッティ、大変だと思っけど・・・はい」

僕は‘きつつき’を描いてフロッティに回すと、げ・・・と苦い顔をした。

「お前らいじめか!」

フロツティの声と共に、バスの中で笑い声が響く。

「フロツティ！条件は2文字で最後が‘ん’だぞ！」

「は！？」

先生が意地の悪い笑みを浮かべ、フロツティに更なる条件を追加した。

「あんにやろっ……」

フロツティは渋々とマジックペンを手に、それを考え始める。

ピコンツと何かを閃いたのか、フロツティは笑みを浮かべて描き始めた。

「これで……如何だあ！」

フロツティはそれを描いて、皆に見せる。

描いた物は……‘金’だ。

「2文字で、最後は‘ん’……。正解だ！」

「イエー！」

先生の声と同時にフロツティが立ちあがって、拳を突き上げる。

全て繋がった事に全員は喜び、歓声を上げた。

因みに先生が描いたのは馬だったのだが、後で全員が確認したところ、象にしか見えなかったらしい……。

全員一致により、先生が更に落ち込んだ事を記しておく。

3・4時間バスは走り続け、緑豊かな別荘地へ到着した。

・・・別荘地？

「先生、ここって別荘ですよね？」

僕が不思議に思っただけで先生に尋ねると、コクンと頷き返されてしまう。

「先生の友人が金持ちでな、旅行費渡したら難なくOKくれた訳だ」

「はあ、なるほど……」

「喜べ！別荘は広いぞ！」

納得している僕から視線を外し、先生はバスを降りた皆に声を張り上げた。

それを聞いた者達の中で、我先にと林の中へ走っていく生徒もいる。

フロツティは僕と行く様子で、珍しく動かなかった。

リアは先程から読書を続けており、バスには見事酔わなかった様子。

残った僕達は先生と共に、林の中へと入っていく。

道はきちんと舗装されていたが、それでもやはりデコボコしている。というのに、リアは本を読みながらも平然と歩き続けた。

時々、道の上まで伸びてきた木の枝を、本から視線を上げずにスイスイと見えているように避け、先生もそれには驚いている。

「かなりのもんだな・・・」

コソリと僕に耳打ちする先生に、思わず苦笑してしまった。

そうこうしているうちに、別荘に辿り着く。

「こいつあでけえ・・・」

フロツティも別荘の大きさに唖然とし、ボウツと見上げていた。

先生は別荘の鍵を開け、皆を中に入れる。

中は左右対称で、中心はちょっとした空間になっており、壁際に個室の入り口と思われる扉がいくつも並んでいた。

一番奥に階段があり、左右どちらも2階に上がれるようになっていた。

2階も恐らく個室だ。

ここは中央リビングと呼ばれるらしい。

「部屋の数は一六！二人一組になって使用するように！」

先生が指示すると、リアはバスで隣に座っていた女の子と共に、一階の部屋へ入っていく。

「女子は一階！男子が二階だぞ！」

先生がはしゃぐ皆に声を荒げた。

僕とフロッティは右の階段を上り、二階の一番奥にある部屋へ入る。

「お、結構広い！」

「確かに」

ベッドが二つ用意され、中央にテーブルもあった。

窓からは森林を眺める事が出来る。

僕達はベッドのそばに荷物を置き、中央リビングに戻った。

皆も集まっており、先生から次の指示を聞く。

何でも、この別荘から少し行ったところにキャンプファイア専用の広場があるらしく、今夜はそこで夕飯だとか・・・。

今は一時半なので、それぞれの個室もしくは中央リビングで、各自持ってきた弁当を食べる。

その後は別荘内で自由行動だ。

「何か質問はあるか？」

先生が最後の確認をするが、誰も異論は無い。

「では昼食！」

その言葉を聞くや否や、皆が散らばる。

「何処で食べる？」

「部屋で良いだろ」

僕の問いかけにフロッティは迷わず答え、僕達は2階の個室へ戻った。

この後の自由行動で何をするか話し合いながら、パクパクと食べ進む。

「トランプ持ってきたけど・・・」

「おお、リンクナイス！」

僕がボソリと呟いた途端、フロッティがグッジョブ！とサムズアップして来た。

あはは、と苦笑しながら僕達は昼食を終える。

「如何する？リアも誘おっか」

「そだな」

2人だけではつまらないだろうと思い、リアを呼ぶ事にした。

1階に降りて、リアがいる部屋の扉をノックする。

—— コンコンッ

「・・・はい」

少しして、リアが本を片手に扉を開けた。

「暇？」

単刀直入に僕が聞いてみると、リアは僕が右手に持っていたトランプを一瞬見て、笑みを浮かべる。

「どちらでも」

「んじゃやろう」

「良いけど・・・強いわよ？」

リアの笑みに僕とフロツティは、え・・・と顔を固めた。

「だあゝっ！」

「つ、強い・・・」

フロッティはトランプを上投げ捨て、僕はあり得ないようにリアを見つめた。

リアは本を読みながらも、七並べを見事に勝利する。

4と6を全て止められてしまった。

「こういうのは、頭を使うのよ。リンクは頑張れば出来るでしょうけど、フロッティは無理かしらね」

「ぐ・・・認めたくないけど、認める・・・」

フロッティは頂垂れながら小さく呟いた。

そのやり取りを、苦笑いしながら見ている僕。

その後、ババ抜きもしたのだが再びリアが一番抜け。

「七並べは分かるけど、何でババ抜きまで・・・？」

僕が不思議そうに尋ねてみると、リアはクスリと小さく笑い本を読みながら答えてくれた。

「自分の手札、回って来たカード、抜けていったカード……。それらすべての番号、マーク、配置を覚えておけば簡単よ・・・」

「全っ然、簡単じゃない・・・」

リアは淡々と言って見せるが、僕はその頭脳に呆れてしまう。

その後も連勝され、夕飯の時間となりキャンプファイアのもとへ向かった。

ユラユラと燃える炎と、音を立てて弾ける木。

フロッティは楽しそうに先生とやり合っていたが、僕は炎を見ながらボウツとしていた。

炎、か・・・。

何だろ、何か思い出せそうなのに・・・記憶の渦から出て来ない・・・。

「無理に思いだそうとしても、苦いだけ・・・」

僕の隣で本を呼んでいたリアが、横目でそう言った。

「・・・え？」

「虚ろな眼は、記憶を掘りだそうとしている証拠・・・。自然に思っ
いだした方が、気分は楽よ」

リアは何事も無かったかのように、再び本を読み始める。

「・・・そうだね。ありがとう」

「どうも・・・」

リアの言う通り、もう少し待ってみようかな・・・。

出てくるかもしれないし、ね。

4話：短期旅行の楽しみ（後書き）

太陽の音が響き始める朝の霜。

忍び寄るは罪を犯した影・・・。

5話：表裏一体の世界（前書き）

5話、参りましょうか。

5話：表裏一体の世界

<Side リアファル>

「・・・」

午前4時頃。

私は布団から体を出し御手洗いに向かい、鏡の前に立って思いに耽^{ふけ}る。

・・・如何して、眼が覚めたのかしら。

鏡に手を当て、映る自分の顔をなぞった。

思い出すのは、深い深緑の色。

吸い込まれるような・・・オレンジ色の瞳。

元氣かしらね、あの子・・・。

私は御手洗いから出て、部屋に戻ろうとした――ッ!?

人影が3人。

しかも子供じゃない・・・大人?

大人達の脇には、如何やら薬か何かで眠らされたクラスの女の子達
が。

あの3人、確かニュースで言ってた銀行強盗の・・・。

人を殺した、とか言ってたわね。

最悪だわ・・・。

私は素早く扉の陰に隠れたが、1人に見つかってしまい眠らされた。

眠らされる直前、2階の手すりの陰に誰かいたような気がする。

2階の一番奥・・・。

リンク・・・？

<Side グラムドリンク>

——コトッ

僕は、何かの物音で目を覚ました。

隣のベッドでは、フロッティがいびきをかいて眠っている。

・・・あれ？

気の所為だったのかな・・・？

扉を開けて中央リビングを見下ろすと、人影が見える。

先生・・・じゃない！

すぐに手すりの陰に隠れ、状況を把握した。

つて、あの人達テレビで！

あ、リアが！

とりあえず見つからないように・・・！

僕は息を殺し、3人の大人達が出ていくのを見守る。

3人共、男性のようだ。

「人質はこんなものか・・・」

「4人もいりゃ、十分だろ。察^{サツ}がしつこく探し回すから、人質まで準備しなきゃいけねえじゃんかよ・・・」

「それでは、私達の隠れ家へ帰りましょうか・・・」

3人はリアを含めた4人の女子を連れ去り、林の中に消えた。

僕はぐっすりと寝ているフロッティを、申し訳なく思いながらも叩き起こす。

「起きて！」

「んあ？」

半目の状態でフロツティが体を起こした。

「リアがさらわれた・・・！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何iiiiiiii!?!」

僕の言葉にしばしの沈黙だったフロツティだが、すぐさま眼が覚める。

「如何した!?!」

直後、先生が驚いた顔して飛び込んで来る。

ナイスタイミング!

<Side リア>

「っ・・・」

私は、何処かの倉庫のような場所で眼が覚める。

「あ、リアちゃん」

クラスメイトの女子が大丈夫と声をかけてきた。

4人全員、両手を後ろに回されて縛られている。

「無事よ、怪我はしてないから・・・」

私は倉庫内を見回して、何か鋭い刃のような物がないかと探してみ
たが、何も見つからない。

そもそも、ほこりが被っている倉庫内は何も入っていなかった。

「ここ、何処なんだろ。気づいたら変なところにいて・・・」

1人の女の子がボソリと呟く。

3人に事を言おうかと思ったが、不安にされるのも如何かと思い口
をつぐんだ。

「何処かっていうのは、分かりそうね・・・」

私は立ち上がって窓の外を見る。

朝方で薄い霧がかかっているが、遠い向こうに私達の別荘が見えた。
グラスタを呼び出して壁をぶち壊そうとも考えたが、3人に気づか
れる可能性がある。

私達のグラスタ相手は、まだ戦闘経験が薄い。

大人のグラスタには敵わないだろう・・・。

「ねえ、グラスタを呼び出して脱出しましょうよ」

思っていた事を丁度1人が述べる。

「やめておきなさい・・・」

「如何して？」

「相手は大人。勝算は薄いわ・・・」

私が外を見ながら答えると3人は落ち込んだが、直後扉が開かれた。

サングラスに鼻の下まで布で覆った、背の高い人。

「お、全員起きてんな。悪いが人質役をしてもらうぞ」

「っ・・・」

その言葉に、思わず気の弱そうな女の子が息を漏らす。

「ちよつといいかしら・・・？」

私は窓の外を見ながら、その人に時間を尋ねた。

「・・・午前6時だ」

その人は、怪訝な顔をしながら腕時計を見て答えた後、扉を閉じて姿を消す。

「6時・・・あれから2時間か・・・。そろそろね」

私は、リンク達が気づき私達を搜索している事を踏まえて考え、行動を起こすべきだと頷いた。

全身に蒼いゴッターを纏い、それを縛られた手に集中する。

「何を・・・」

3人共、不思議そうに見ているが気にせず、頭の中に短剣を描いた。

ゴッターがそれを形作り、短剣が作られる。

「すっごくいい・・・！」

1人が、声を出来るだけひそめて声を出した。

――ブチッ

その短剣で全員の縄を斬り、自由になる。

鞘も作り、腰裏のベルトに刺しておいた。

「さあて・・・？」

手首を回して緊張をほぐし、窓を開けて全員そこから脱出する。

「我が乞うは鋭き視力。逃す事無く敵を射よ・・・」

蒼いゴッターが頭上で渦を巻き、茶色の巨鳥が現れた。

ファルケ
「鷹・・・！」

私達はファルケに乗り、天へ舞い上がる。

丁度飛び立った頃、強盗団が気づき小屋から飛び出していた。

「ファルケ、仲間を探して」

『はい』

私はファルケの頭の方へ歩み寄り、指示を出す。

ファルケの視力は折り紙つきだ。

『見つけました……。リアファル様、後方より敵が参ります。指示を……。』

ファルケはリンクのヴォーゲルを発見したが、後ろから強盗団がグラストの巨鳥を使って飛行してくる。

「無視して。ヴォーゲルと合流する事が最優先」

『了解しました……。』

ファルケは大きく羽ばたき、速度を上げる。

「リア〜！」

「無事か〜！？」

ヴォーゲルの上に乗ったリンクとフロッティが、こちらに手を振っていた。

小さく振り返し、後ろを確認する。

距離は縮まっている事を知り、女の子に声をかけた。

「あなた、確か巨鳥のグラスタがいたわね・・・？」

「う、うん」

「すぐに呼んで」

「分かった」

女子は私の言葉に頷き、巨鳥を召喚する。

「移つて。先生のもとに戻りなさい」

私以外の女子はその巨鳥に移動し、ファルケはヴォーゲルの隣で滞空した。

「リアちゃんは・・・？」

「いいから、行きなさい・・・！」

私が口調を強くして命令すると、女子は頷いてこの場に私達だけが残る。

「はっ！讓ちゃんやってくれるねえ！」

強盗団の1人が不気味な笑みを浮かべ、私を睨んだ。

「讓ちゃんはやめていただけるかしら・・・？あなた達、強盗をやらかした悪者さんでしょう？」

「・・・何が言いたい」

冷静な1人が私を睨み、問いただす。

私は何も答えず、腕を組んだ。

双方それぞれの巨鳥の上に立ち、対峙する。

「まったく、裏切り者を始末したと思ったら、讓ちゃんに顔見られちまうしよお・・・。ついてねえな」

陽気な1人がサングラスや布を取り、顔を露わにした。

裏切り者を始末・・・？

という事は銀行強盗は本当の狙い、つまり殺人を隠す為の・・・。

他の2人も顔を覆っていたそれらを取る。

あの陽気な1人は黒紫の髪に紫色の眼。

ゆったりと落ち着いている1人は、藍色の髪に深い藍あおの眼をしている。

そして、リーダーを思われる冷静な者が、茶髪に片目だった。

右目に眼帯を付け、左目から魂が宿っていないような、沈んだ茶色

がこちらを見据えている。

「顔を見せたって事は、生かす気は無いって事で良いのかな・・・？」

リンクが笑みを浮かべながら問いかけると、リーダーが頷いた。

すると、遠くから先生達がグラスタを使って飛んで来る。

「・・・悪いが、来てもらっぞ」

状況が悪いと判断する強盗団のリーダー。

隻眼の男が懐から瓶を取り出し、中に入っていた紅い粉を周りに振りまいた。

「何・・・？」

私達が粉を見てみると、周りの景色が歪み始め荒れた大地に変化する。

何処・・・？

先程の深い山々は、何処にも見当たらない。

「ここが何処だか分からねえって顔してんな。教えてやるよ。ここはアンダーヴェルト！グラスタが住む世界さ！」

黒紫の髪をした男が、両腕を広げてあざ笑う。

アンダー・・・ヴェルト・・・！？

<Side グラムドリンク>

「おお、そーいやまだ名前言ってなかったなあ……。俺は剣のソーサラー、グラディウス」

陽気な男が名を名乗る。

「短剣のソーサラー、ステイレット……」

藍色の髪をした男もそれに習い、同じく名乗った。

「槍のソーサラー、ゲイボルグだ」

最後に隻眼の男が呟き、僕等に向き直る。

「そちらさんは？」

グラディウスがニヤリと笑って、僕達の名を尋ねたが、

「教えたくないわね……」

リアが苦い笑みを浮かべながら、答える事を拒否した。

「ひでえな。こっちは名乗ったってのに……」

「……。はあ。リアファルよ」

「フロツティだ」

「グラムドリンク・・・」

僕達も礼儀に習い、名を返す。

ゲイボルグが片眉を上げ、怪訝な顔をした。

何か引つかかる事でも言ったかな・・・？

ゲイボルグの視線は僕に向けられている為、思わず身構えてしまう。

双方の巨鳥は地上に降り立ち、それぞれ地面に足をついた。

直後、ゲイボルグ達がゴッターを纏う。

ゲイボルグは黒、グラディウスは紫、ステイレットは藍色のゴッターだ。

「我が乞うは黒き鉤爪。刃もろとも天を裂け」

ゲイボルグの隣に、黒い毛を纏う獅子が現れる。

「ラーヴェ
獅子」

ラーヴェは低く唸り、その場に腰を下ろした。

「我が乞うは貫きし刃。心の臓を射とめよ・・・！」

グラディウスの頭上に黒と白の羽毛を持つ、立派な嘴の鳥が姿を現

し翼を広げて滞空する。

「シューフエ
鳴・・・！」

「キエエ・・・」

シューニーフェは声を出して唸り、僕達を睨んだ。

「我が乞うは深き群青・・・。その身を広げ天を覆え」・・・」

ステイレットの藍色のゴッターが渦巻き、深い青を湛えた巨鳥が現れる。

「インディヒ
藍・・・」

ステイレットはインディヒの頭をなで、闘う気はほとんど無いように思えた。

ゲイボルグはここまで運んできた巨鳥に合図し、帰って良しと声をおくる。

巨鳥は翼を広げて飛び立ち、遙か彼方へ消えた。

勝てる・・・？

いや、無理・・・！

フロツティが紅いゴッターを纏い、詠唱を始める。

「我が乞うは紅き炎。脆い物全てを噛みちぎれ！」

フロツティの隣に、紅蓮の狼が姿を現した。

「^{ヴァグ}紅狼！」

「オオウ・・・！」

ヴァグーは低く唸り、いつでも駆け出せる状態で待機する。

「おうおう、やるかあ？」

グラディウスは紫色のゴッターで剣を作って右手に握り、不気味な笑みを浮かべて挑発した。

その一言にフロツティがムカツと来たようだが、僕が手で制す。

「挑発に乗らないの」

「分かってる・・・」

そうは言うが、その額には怒りのマークが浮かんでおり、堪えてい
るなと感じた。

<Side ゲイボルグ>

「如何すんよ、ゲイボルグの兄貴」

グラディウスが剣を肩に担ぎ、あいつらを眺める。

俺はしばらく考え、始末するか検討した。

「・・・半殺しで良いだろう。殺すなよ」

「ええ」

「理由は・・・？」

つまらん！と喚くグラディウスを無視して、ステイレットが疑問を投げかけてきた。

まだ気になる事がある、と返す俺にステイレットは頷く。

こいつはグラディウスの馬鹿と違って頭が回るし、指示に従う忠義もあつた。

そこは良いのだが、もう少し口を訊いても良いとは思つが・・・。

俺も人の事は言えんか。

「何で殺さねえだ？」

「今言つただろう。気になる事があると・・・」

「ケチ」

「やかましい」

いちいち気に障る奴だな・・・。

文句を呟きながらも、グラディウスは剣を地面に突き立て支えにする。

「そんじゃ、行つくぞぉ・・・」

完全にやる気無しだな、こいつは。

すると、向こうの・・・リアファルとか言ったか。

女が腰に刺していた鞘から短剣を引き抜く。

それを見たステイレットが、ゴツターで鋭い短剣を2本作り上げ、右に順手で左に逆手で握った。

ステイレットは短剣の使い手だ。

短剣を使えば右に出る者はいないだろう。

「構え・・・」

俺が右手をスツと上げると、ラーヴェが腰を上げて態勢を低くした。

さあ、開戦だ・・・。

5 話：表裏一体の世界（後書き）

目の前にあるのは、絶対的な力の差。

その壁は高く、少年達は苦しみに足づくであらう……。

6話・垣間見る裏の組織（前書き）

6話、参りましょう。

6 話：垣間見る裏の組織

<Side グラムドリンク>

「武器を作りなさい」

リアが短剣を右手に、僕とフロッティに指示した。

「う、うん」

武器を作るのは初めてだったが、一応授業で習っていた為、意識を集中してイメージする。

「やっぱりこれだろ」

フロッティはうん、と頷き剣を作り上げた。

僕は・・・。

イメージしていると長い物が浮かび上がり、僕は槍を作り上げる。

すると、ゲイボルグがゴッターを纏い、槍を創生した。

僕と同じ・・・！

そういえば槍のソーサリーって・・・！

「勝算は薄いわね・・・」

「同感・・・」

「そうか？」

リアの言葉に頷く僕だが、フロツティはプラス思考で考える。

「1つ質問良いかな？」

僕は気になる事があって、ゲイボルグ達に問いかけた。

「・・・何だ」

少々不満げなゲイボルグだったが、僕は怯まず質問を投げかける。

「おじさん達、裏切り者が如何とか言ってたよね？つまり組織的なグループって事でしょ？組織名、何て言うの？」

僕がそういうと、何故かグラディウスの眉間にしわが寄った。

「お、おじさんて・・・俺まだ20代なんだけど・・・？」

「・・・もうすぐおじさんだね」

「やかましいっ！」

小さく呟いた僕の声に敏感に聞き取り、グラディウスがブチッと怒る。

ゲイボルグは僕の質問に少し悩んでいたが、口を開いた。

「組織名・・・ファイオ・アストレ闇の大鷹」

ゲイボルグは静かに答え、右手を振るう。

途端、ラーヴェが駆け出した。

「獅子には狼ってか、ヴァグー！頼むぞ！」

『おう！』

接近してくるラーヴェにヴァグーが挑み、インディヒにファルケ、シュニーフェにヴォーゲルが対峙する。

リアとステイレット、フロツティとグラディウス、僕とゲイボルグが相対した。

それぞれ空間を取って、相手と向かい合う。

「確認するが・・・グラムドリンクと言ったな？」

「そうだけど・・・？」

ゲイボルグが槍を右手に問いかけてきた為、頷き返した。

「そうか。それが分かれば良い・・・」

ゲイボルグはそれで満足したのか、左手を腰の後ろにして態勢を落とし、槍を構える。

隙が無い・・・！

こっちはつい先程まで、戦闘をした事が無い普通のソーサラーだ。

達人に勝てる訳が――。

――ブオンッ！

「ッ！？」

考えていた最中にゲイボルグがこちらに急接近し、槍を突き出してきた。

ほぼ反射的に体を右に反らす。

かと思えば、唸りを上げて槍の穂先が向かってきた。

「っ・・・！」

手を動かして、穂先を僕が持っている槍の柄で弾く。

――タンッ

ゲイボルグは人間とは思えぬ跳躍力で後方へ跳び退り、口元に小さな笑みを浮かべた。

「よく今を防いだ。槍を・・・否、武器をその手に持つのは初めてだろう？」

「まあね・・・」

普通に返してはいるが、心臓ははち切れそうなほど脈打っている。

これが、命のやり取り・・・！

防げなかったらと思うと、思わず冷や汗が背筋を伝った。

「我等が組織に眼を付けられた事、後悔せよ・・・」

——フツ・・・

ゲイボルグが静かに呟いた直後、姿を消す。

何処・・・！？

「如何した・・・？何処を見ている」

「ツ！？」

気づけば僕の背後にいて、穂先を僕の首筋に突きつけている。

「もう一つ確認したい・・・。この問いの答えにより、お前の運命が変わると思え」

「な、何？」

「グラムドリンク、お前に兄弟はいるか・・・？」

兄弟・・・？

何を聞きたいんだ、この人は・・・。

「正直に答える・・・」

ゲイボルグの右目が怪しく輝き、僕に殺気を射ていた。

「・・・いるよ」

「兄か？」

「そうだけど、何か問題でも・・・？」

僕が怯まず問いかけたところ、ゲイボルグは静かに笑う。

「クク・・・！そうか、兄がいるのか・・・！」

「な、何さ」

変な奴だなと思いつつも、笑われる理由を知りたくて再び問いかける。

が、ゲイボルグは僕の首筋から穂先を離し、眼帯を付けた左目を押さえながら何処かへ歩いていった。

「・・・こっちは答えたんだよ！？」

僕が大きく声を張り上げると、ゲイボルグは歩を止めて振り返り、

「いつか理解出来る時が来るだろう。俺が問うた事を忘れるな・・・」

「

一言言い残し、ラーヴェを呼ぶ。

そして僕に紅い粉の入った瓶を投げ渡し、ステイレットやグラディウスを呼んで、彼等は飛び去って行った。

僕ははっとなり、皆の状況を確認する。

「フロッティ、リア！怪我は！？グラスタの皆も！」

僕の声に反応し、皆が集まった。

「俺は右腕を少し・・・」

「私は左腕ね」

フロッティは右腕、リアは左腕に切り傷を負っていた。

ヴァグーは胴の部分に噛みつかれた跡があり、血が滴り落ちている。

ファルケは羽が乱れている程度だが、ヴォーゲルは首筋に突き刺された跡があり、白銀の羽が紅く染まっていた。

「ヴォーゲル！」

地面に崩れるよう倒れたヴォーゲルに駆け寄り、傷口の様子を見る。

『不意を突かれた・・・。主は無事か・・・？』

「僕は平気だから、自分の事を心配しなよ！」

如何して人の事を心配するのさ・・・！

自分の体が傷だらけなのに・・・。

僕は傷口の様子を確認しながら、ヴォーゲルを叱る。

『なら良い……。皆^{みな}の傷を回復せねばな・・・』

ヴォーゲルは倒れながらも輝く尾羽を上げ、癒しの風を流した。

銀色の風が、僕達の間を縫うように駆け抜けたと思うと、皆の傷が回復する。

グラスタも含めてだ。

ヴォーゲルはムクリと起き上がり、疲れたように一度思い切り翼を広げ、猫のようにブルブルと頭を振った。

『む・・・主、その手に持つのは何だ？』

「え、ああ、これ？なんかゲイボルグが置いてったんだけど・・・」

ヴォーゲルに問われ、僕は改めて瓶をよく見てみる。

「そんな物持つてて良いのか？」

フロツティが疑い深げにジューツと瓶を眺め、むう・・・と唸った。

リアは僕に手を伸ばし、瓶を受け取る。

「これ、私達がこちらへ来る時に、あのリーダーさんが振ってた物じゃない？」

「って事は、アロنداイトに帰れるって事で良いのかな？」

「お、マジか」

僕が首を傾げて呟くと、フロッティの瓶を見る目が変わった。

リアは右手に持っていた短剣を腰の鞘に納め、瓶のふたをキュポンツと空ける。

フロッティもゴッターで鞘を創生し、カチンツと鞘の中に剣を納めた。

僕も2人に習い、槍の穂先を覆う小さな鞘の形をした、革製の物を作る。

シュツと中に入れ、穂先を覆った。

「振ってみる？上手くいけばアロنداイトに戻るけど・・・」

リアは疑問形で返しておきながら、勝手に振ってしまう。

粉が舞い散り、周囲の景色が歪んだ。

かと思えば、森林の中にいる。

グラスタ達もアロنداイトに移動したようだ。

「戻っていいよ。今回はありがとつ、ゆっくり休んで」

『主も気をつけられよ・・・』

ヴォーゲルは僕に注意を促し、グスタ達はアンダーヴェルトに帰還する。

「さて、先生達に会ったら何て言いましょうか・・・」

リアは口元に笑みを浮かべて歩き出すが、僕とフロツティはう・・・と小さく呻いた。

わ、忘れてた・・・。

何て言おう。

「おーい！こら、やっと見つけたぞっ！」

間の悪い事に、先生がこちらに走って来る。

うわ、如何しよう・・・！

僕とフロツティは冷や汗ダラダラだったが、リアは平然としていた。

「こらあ！お前ら探したんだぞっ！」

当然の如く説教が始まる。

何処に行っていたんだと問われ、僕は困り果てるが、リアは口を開いた。

「先生、女子3人は如何しました？」

「は？あ、ああ。あの3人はいきなり大人に襲われて、顔も覚えていないそうだが、とりあえず今は別荘にいる」

「そうですか……。なら良いのですが、私とその3人は恐らく、ペンション荒らしか何かのグループに襲われたんだと思います。後で駆けつけてくれたリンクとフロッティも、勿論私も顔は見ていませんが、向こうのグラスタの攻撃を食らい、墜落してしまったようで気を失っていました」

「そ、そうか。怪我は無いな？」

リアの真実5割・嘘5割の見事な説明に、僕とフロッティは呆然とする。

先生は僕達の体を大まかに確認し、怪我が無い事を知って安心した。

「とにかく別荘に戻る事！良いな！？」

「はい」

「あ、分かりました」

「へーい」

リアと僕がそう返し、フロッティの気の抜けた返事が先生の耳に入る。

「フロツティ君、返事はシャキツとしなければならんよ？」

先生はフロツティの頭を拳で挟み、毎回恒例のグリグリ攻撃をお見舞いした。

「あだだだっ！は、はいっ！分かりましたあっ！」

「うむ、よろしい！」

「し、死ぬ・・・！」

やっと解放されるフロツティに僕は心の中で同情し、別荘へ向かった。

別荘に戻ると、皆が、

「大丈夫だった!？」

とか、

「怪我ねえか!？」

とか、

「何処行つてたの!？」

とか、

「犯人の顔見たか!？」

とか、エトセトラ・・・、

以下無限に広がる質問攻めを食らう。

リアがある程度答えてくれたが切りが無く、先生が止めてくれた。

「はい、そこまで！今日はとりあえず予定していた日程は中止！まず・は、この3人以外部屋に戻れええええっ！！」

「「「「「「「「「「はい・・・」「」「」「」「」「」

先生の指示に仕方なく従う皆。

さっきまで群がっていた野次馬は消え失せてしまった。

お、恐るべき先生パワー・・・。

「3人は詳しい話を聞きたいからな、先生の部屋に来るように」

ありゃりゃ、結局は質問攻めに会った・・・。

<Side フロッティ>

だゝもうっ！

面倒くせえったらありやしねえよな・・・。

さっきから質問質問質問質問・・・！

ほとんどリンクとリアが答えてくれたけど、この時間が面倒くさくて仕方が無い。

「そうか。よし、質問終了！部屋に戻ってくれ」

「っしやあ！」

先生のその一言に待ってましたと立ち上がり、部屋を出ていく。

「やっと終わった」

「本当。無限に続くのかと思ったわ」

リンクとリアも部屋を出て、自分の個室へと散った。

その後は短期旅行も気を取り直して再開され、何とかその日も終わりを告げる。

翌朝、俺達は帰りのバスに乗り込んだ・・・。

<Side ゲイボルグ>

俺達はアンダーヴェルトの拠点に戻り、幹部の1人であり、俺達の司令でもある人物へと向かっていた。

拠点と言っても、立派に出来た城のような建物ではない。

石や岩壁で出来た要塞のような物だ。

厚い扉を開け、要塞内に入る。

「なあ、この格好もついいだろ？」

グラディウスが嫌そうに、強盗用の衣服を示した。

「そうですね……。いい加減元に戻しては如何でしょうか・・・？」

ステイレットもそれには賛同するようで、俺に許可を求める。

俺もうんざりしていた為、頷き返した。

それぞれゴッターを纏い、衣服を組織用の物に変える。

ズボンや上着は黒い質素な物で、その上から革で出来たような1枚の広いマントを羽織る。

全て真っ黒に彩られ、隠密行動がしやすい。

要塞内の通路を歩き、1つの扉の前に立つ。

「そついや、あいつがいねえけど3人で良いのか？」

グラディウスがもう1人のメンバーを気にしたが、如何でも良いだろうと切り捨てた。

あいつはよく抜けているからな……。

——コンコンッ

「・・・入ってくれ」

中から俺達よりも若い声が聞こえ、扉を開ける。

中には作戦会議用の広いテーブルと椅子しか無く、一番奥の椅子に1人の少年が座っていた。

俺達の司令であり、幹部の1人、ヤルングレイプ司令官だ。

俺より年は下だが、頭も切れるし剣術の腕も確か。

俺は俺で慕っている上官だ。

というより、組織内で慕っているのはこの人だけだが・・・。

「只今帰還しました・・・」

「御苦労さん」

それに、この方は幹部の中で唯一俺達のような一般兵の面倒を見してくれる。

他の上官は決してそんな事はしない。

司令下にいない者でも、ヤルングレイプ司令官を好んで移動してくる事もある。

といっても、この司令官は人を見る眼がある為、ある条件を満たす

兵でなければ入れないが・・・。

俺もその条件は知らない。

「息災で何より・・・。状況報告をどうぞ」

「のですが・・・この2名には席を外していただきたい」

俺は両隣にいたグラディウスとステイレットを横目で見て、司令官に合図を送る。

「君がそう言うなら・・・。外してくれるかな？」

「はい・・・」

「じゃあねえか・・・」

司令官を2人も慕っている為、逆らう気は全く起きない。

2人が扉の向こうに消えたのを確認し、俺は口を開く。

「司令官には・・・弟がいましたね・・・？」

俺の一言で、司令官の眼が変わった。

少し鋭くなった気がしたが、それも一瞬でもとに戻る。

「それが如何かしたのかな・・・？」

「いえ・・・今日、お目にかかったもので・・・」

そう言うと、驚いたように眼を見開く司令官。

「会ったのかい？」

「アロンドイトで偶然に……。こちらに連れ込んで一戦交えましたが、司令官と似ていて反射神経がよろしいようですね」

「・・・そう、か」

司令官は懐かしいような笑みを浮かべ、席を立つ。

「因みに、アロンドイトへ帰したのかい？」

「一応は……。瓶を渡しておきましたので、問題は無いかと・・・」

「はは。本当に君は優秀だね」

司令官は笑いながら扉へ向かう。

「今、弟と会うには早すぎる。向こうに返したのはありがたいな・・・」

「光荣です」

「報告は・・・？」

「以上です」

「うん。帰ってよし」

司令官は扉を開け、帰還の許可を出した。

俺は一礼して部屋を退出し、グラディウスとステイレットを連れ、要塞内の個室へ帰った・・・。

6 話：垣間見る裏の組織（後書き）

分からぬならば、知識を拾え、聞け。

その人物は本のように膨大な量を、身に染み込ませているのだから・
・。

7話：4人のソーサラー（前書き）

ええつと、ここで両チーム4人勢ぞろいですね。

では7話、参りましょう。

7話：4人のソーサリー

<Side グラムドリンク>

午後4時半頃。

「ただいまぁ・・・」

いろいろな事があつてかなり疲れていたが、家に帰るとその疲れが一気に襲つて来る。

『おかえり』

遊びから帰つて来た時、母にいつもお菓子をもらっていたが、今は自分で用意するのだ。

何処か寂しさを感じながらも、テレビを付けてニュースを確認する。

強盗団の事は何も知らされていなかった。

それもそうだよね。

リアは、ただのペンション荒らしって言ったんだから・・・。

「あ、そういえば・・・」

僕はポケットから瓶を取り出す。

リアが持っていてと僕に渡したのだが・・・。

これを如何しろ？

まあ、とりあえず明日は土曜だし・・・リアやフロッティと相談しようか。

僕はポケットに瓶をしまい、ゴロンツとソファに寝転がった。

――プルルルツ、プルルルツ

「・・・電話？」

電話の着信音が部屋の中に木霊し、僕はノソリと起き上がる。

電話の受話器を取ろうとして、手を止めた。

僕の家に電話をかけて来るという事は、僕の知り合いだ。

フロッティか、リア。

もしくは学校から、という事なのだが・・・。

「フロッティからだったら、如何しよう・・・？」

あいつの電話はかなり変わっていて、心構えが重要である。

僕は意を決して受話器を手に取り、耳に当てた。

「はい、グラムドリンクです」

『どちらさん？』

受話器からフロッティの声が聞こえた途端、僕は大きなため息を吐く。

「そのやり方、やめてよね」

『はは、いいじゃん。こっちは面白いんだからよ』

「面白いのはそっただけでしょ・・・」

向こうから電話をかけて来たというのに、先程みたいに疑問形で返してくる事がある。

他にも、

『グランですが』

とか、

『ああ、兄貴？』

とか、

『声大きいぞ』

などと、いきなり訳の分からん事を言い出す為、こちらは心の準備が欠かせない。

ある程度の事で動揺してはいけないのだ。

「で、何の用？」

『んだよ連れねえな』

「僕は魚じゃないぞ・・・」

『「連る」と「釣る」の間違いじゃねえか？それ・・・』

フロツティが思わずというように、突っ込んでくれた。

・・・冗談だつて。

『あのさ、リアから電話貰ったんだけど、明日午前10時頃でいいから、私の家に来て』だつてよ』

「リアが？・・・どして？」

『知るかよ。とりあえず伝えたからな』

—— ツー、ツー・・・

切るの早いなあ、フロツティ。

にしても、何で行かなきゃいけないんだろ・・・。

僕は受話器を戻し、考えながらも夕飯を作り始めた。

が、

「あちゃゝ・・・」

冷蔵庫の中は、最近買い出しに行っていなかった為、ほとんど空に近かった。

仕方ない、と僕は買い出しに出かける。

「大漁大漁」

僕は何処ぞの漁師のような言葉を吐きながら、上機嫌で帰路に着く。薄暗くなってきた道を歩きながら、真っ直ぐ家へ向かっていた。

——コツ、コツ・・・

背後から足音が聞こえた為、ふと振り返ってみる。

「ツ・・・!？」

そこにいた人物を見て、僕は驚愕に眼を見開いた。

全身を黒い衣服に包み、眼帯をかけた男性。

ゲイボルグ・・・!

「・・・アロンドイトに帰っていたようだな」

「おかげ様で・・・」

僕は一言そう返し、警戒心をむき出しにする。

「感謝してよね」

僕がそう言つと、ゲイボルグは怪訝な顔をした。

「ペンション荒らして事にしといたから」

「・・・ほう。ずいぶん優しいんだな」

「良いの良いの。僕達が捕まえるから」

そういう事が、と納得するゲイボルグは口元に笑みを浮かべ、背を向けた。

何事も無かったかのように歩き出し、路地を曲がる。

——ダッ

僕は急いで後を追ひ、交差点を曲がったが誰もいなかった。

奇妙な帰り道を終え、僕は家に着いていた・・・。

<Side リアファル>

——ピンポーンッ

来たわね・・・。

「はい、いらっしやい」

扉を開けるとリンクとフロツティの2人が立っており、家の中に入れる。

「何で呼んだの？」

リンクが不思議そうに聞いてきたが、2階の私の部屋へ急かす。

ドアを開け、中に入ると1人の少女がそれを迎えた。

「お久しぶり」

「「ああっ！」」

深い緑色の肩辺りまでの髪と、オレンジ色の瞳。

私の従妹^{いとこ}、ティルヴィングだ。

従妹といっても数ヶ月しか歳は変わらない。

「ティル、久しぶり！」

「相変わらず元気そうだな！」

私達はティルと呼び、リンクとフロツティがティルとハイタッチする。

「当然よ！フロッティがくたばるまで、私は倒れないわよ！」

「何か酷くねえか！？」

私と違って明るい性格の持ち主の為、フロッティと気が合う。

が、その反面、喧嘩もしばしば・・・。

まあ、当然よね。

「でも何でティルがいるの？」

リンクが私に問いかけてきたので、私が呼んだからと返答する。

リンクとフロッティの2人そろって、何で？と問われた。

「リンク、あの瓶持つてる？」

「え？あ、うん」

私はリンクから瓶を受け取り、ティルに見せる。

「む、これは・・・紅い粉だけど・・・」

ティルは将来学者を目指していて、表裏一体の世界を私達の中で一番理解していた。

ティルにこの前起こった事を話し、この瓶を見せれば何か分かると思っただが、無理があったのかもしれない。

リンク達にもそれを説明すると、なるほど頷かれた。

その間、ティルが興味深げに瓶を眺めている。

「これ・・・裏渡りじゃない？」
ラケン・ウダーホルト

「「「え・・・？」」」

思わぬ事に、ティルはそれと思わしき名を呟いた。

「何それ・・・」

リンクが身を乗り出して聞き返す。

「ラケン・ウダーホルト。アロンドイトとアンダーヴェルトを行き来出来る紅い粉があるって、本で読んだ事があるの。でも、かなり古い本で内容もそんなに覚えてないけど・・・」

ティルはそう言うけど、この子の記憶力はとんでもないわ。

何せ、あだ名が「本の虫」だから・・・。

読んだ所を頭に次々と、まるでコンピューターのように記憶する。

特に、自分の好きな本は一字一句間違いないで暗記しているのだとか・・・。

「ラケン・・・ウダーホルト、か・・・」

リンクが興味深げに、瓶の中に残っている紅い粉を見つめた。

<Side リンク>

僕は紅い粉を見ていたが、ふいに何かが頭の中を突き抜けた。

「あぁっ！」

——ビクッ

いきなり僕が大声を上げた為、3人が体を小さく震わせた。

「な、何だよ？」

フロッティが問いかけて来るが、僕は昨日の夕方にあった事を3人に話す。

「はぁ！？ゲイボルグに会ったぁ！？」

「如何してもっと早くに思い出さなかったの・・・」

フロッティは大声を出して驚愕し、リアは額に手を当て呆れていた。

が、テイルはというと・・・。

「会ったの！？良いなぁー！」

とまあ、眼を輝かせていた。

・・・何故喜ぶ？

「私その3人と会った事無いから、早く会ってみたいの〜！」

「会っても碌な事無いよ・・・」

僕は戦闘の事を思い出し、思わず苦笑いを浮かべた。

「あ、そういえばティルって・・・何かこんな感じの剣を習ってなかった？」

僕はふと思い出し、普通の剣が少し曲がった物を手で表す。

「あ、‘刀’の事？うん、習ってるよ」

「力、カタナって言うの？」

「そう。東の国で昔、‘侍’って人が持ってたんだって。これも本で読んだの」

さ、流石・・・。

何でも知ってるねえ。

「リアが弓で、ティルが刀、か・・・。頼もしいなあ」

僕とフロツティは特に何も習っていない為、この2人に頼るしかない。

にしても、女子に頼るって如何よ・・・？

情けないよなあ・・・。

「ねえ、これ残ってるけど・・・まだ使えるの？」

ティルが瓶のを振って、紅い粉をまき散らした。

「「ああっ!」」

「何を・・・!」

僕とフロツティが思わず叫び、リアは手を伸ばしかけている。

そんな僕達の心も知らず、部屋の景色が歪んだと思ったら荒れた大地にいた。

「「ティルッ!」」

「「う、ごめん!つい振っちゃった・・・あは」

「あは じゃねえっ!」

舌を出して謝るティルに、フロツティが頭を抱える。

リアはすでに諦め思考だ。

しかも、今の1回で粉を全部使ってしまった・・・。

ティル、何て事を・・・。

<Side ゲイボルグ>

俺はアンダーヴェルトの基地にいたのだが、突如俺達の就寝部屋の扉がノックされた。

—— コンコンッ

「・・・何だ」

俺はムクリと体を起こすが、グラディウスは爆睡している。

ステイレットは先程から起きていた。

「緊急任務です」

扉の向こうから聞こえたその言葉に、俺とステイレットは顔を見合わせ頷く。

俺は扉を開け、兵から任務内容を確認した。

内容は・・・。

「アンダーヴェルトへの侵入者排除です」

「侵入者だと・・・？」

「あ、はい。排除と言っても・・・追い払っただけで結構だと、司令官が・・・」

妙に齒切れの悪い兵に怪訝な顔をし、とりあえず向かうと頷いておいた。

「あと、ラケン・ウダーホルトを持っていくようにと・・・」

「何故裏渡りを・・・。分かった、向かおう」

俺のその言葉を合図に、ステイレットが立ちあがりグラディウスを起こす。

「何だ・・・？」

「任務です・・・。起きてくれますか」

「任務う？おし、分かった」

グラディウスは任務と聞いて眼が覚めたが、ピタツと動きを止めた。

「・・・如何しました？」

ステイレットが尋ねる間に、兵は自分の持ち場へ帰っていく。

グラディウスは部屋の中を見回した後、ムツとした顔になる。

「なあ、あいつもたまには任務に同行させようぜ。日頃休んでばかりだしさあ」

ああ、あいつの事を言っているのか・・・。

俺達は4人で隊を組んでいるが、普段はこの3人だ。

あいつは何かと気が抜けているからな……。

「何や？ワイの事、呼んだかいな？」

黒髪で糸目の男が、タイミング良く部屋に戻ってきた。

俺達3人とは少し違う衣服で、異国で‘着物’とか言われているそうだが……。

「シャシュカ……。珍しいな、お前が部屋に帰ってくるとは」

「いつや、何や知らんけど任務しとおなってなあ。帰ってったら丁度任務が入って来たところやて聞くし……ワイって運が強いんやるか……？」

ふむふむ、などと顎に手を当て頷くシャシュカ。

こいつ、普段は気の抜けた様子だが、隠密行動は4人の中でも一番優れ、刀を使わせれば右に出る者はいないと聞く。

東の国出身だと聞いたが……変わった口調だな。

「……行くぞ」

俺はため息混じりで、シャシュカの腕を掴み任務に向かう。

「置いてくなあ」

その後を、グラディウスとステイレットが続いた。

7話：4人のソーサラー（後書き）

新たに加わる仲間を連れて、双方が動き出す。

相手は強いのか、それとも弱いのか・・・。

8話：予想外は日常茶飯事（前書き）

最後、テイルの予想外の言葉で終わります。

これを予想していた方は、いるでしょうか・・・？

では8話、参りましょう。

8 話：予想外は日常茶飯事

<Side ヤルングレイプ>

アンダーヴェルト基地、要塞内司令室。

俺は椅子に座り、アンダーヴェルトの地図をテーブルに広げ、それを眺めていた。

ここには俺1人しかおらず、ゆっくりとしていた。

「見にくいな・・・」

右目を押さえ、小さく呟く。

俺は右目の視力が無い為、ほぼ左目だけで見ている。

右目の視力を無くしてから約1年経つが、左だけで見るというものもなかなか難しい。

視界が半分しかない。

——コンコンッ

扉がノックされ、入るよう指示する。

兵が1人入って来た。

「報告です。アンダーヴェルトに、アロンドイトより侵入者が現れ

ました」

侵入者という単語に怪訝な顔をし、

「・・・何人？」

「4人の反応があります」

4人、か・・・。

ゲイボルグ隊に任せれば丁度良いな。

「ゲイボルグ隊に緊急指令。侵入者を排除、もしくは追い払えと伝えてくれ」

「はっ」

兵は扉を閉じ、伝令に走って行った。

まさか・・・リンクか・・・？

俺は首から下げているペンダントを握り、歯を噛み締めた。

まだ会いたくないというのにな・・・。

俺のペンダントには紅い宝石が、リンクには蒼い宝石がはめられている。

それぞれ俺が父の形見を、リンクが母の形見だ。

リンク、こちらへ来てはいけない・・・！

お前は幸せを握って良いんだ。

苦しむのは・・・俺だけでいい・・・！

<Side リンク>

『来てはいけない・・・！』

え・・・？

何？

今の声・・・。

懐かしいな、兄さんの声だ・・・。

でも、如何して・・・？

「ク、リンク！」

「ッ！？」

僕がボクッとしていると、フロツティが肩を叩いてきた。

「な、何？」

「今の聞いてたか？とりあえずこの見つかりやすい荒野から離れて、森を見つけるんだぞ」

「う、うん。聞いてたよ」

本当は全く聞いていなかったが、何とかそれを誤魔化する。

が、移動開始早々見つかってしまった。

あの巨鳥が飛んで来、僕達の前で着陸する。

1人増えているが、ゲイボルグ達だ。

「何故帰って来た・・・？」

ゲイボルグが少し怒り気味に問いかけて来ると、僕は思い切りため息を吐いた。

「こっちに来たくて来た訳じゃないのに・・・」

そう、原因はテイルの行動である。

僕達は巻き込まれた訳であり、故意で来た訳でも無い。

「何だと・・・？」

「あ、いや、こっちの話」

聞き返して来たゲイボルグに、やや曖昧に返しておく。

「そちらさんは・・・？」

リアが変わった服を着ている男性に視線をおくった。

「ワイはシャシュカや。よろしゅうな」

ヒラヒラと手を振るシャシュカだが、これまた聞いた事の無い口調で話す。

「うつわゝ、もしかして関西弁！？」

それを聞いたティルが、感動して眼を輝かせた。

「カ、カンサイベン？」

「弁当の仲間か？」

僕とフロツティが怪訝な顔を見ると、シャシュカが笑う。

「はは、弁当の仲間って言われたんも初めてやけど、関西弁やて分かってくれたんも初めてや」

「私ティルヴィングって言うんですけど、シャシュカさん、もしかして日本出身なんですか！？」

「せやねえ」

「うつわゝ、日本人初めて見たあ！」

「おお、喜んでくれるんかいな」

「しかもそれ着物！？すっごくいい！」

「せやろ？ええやろ？嬢ちゃん分かってくれるんやなあ」

「日本出身で着物って事は、刀も使うんですか！？」

「おお、使うで。得意分野や。因みに苦無クナイも使うなあ」

「苦無もですか！？うわ、感動！」

テイルとシャシュカ2人だけの世界となり、他の者は蚊帳の外だ。

「・・・おい」

見かねたゲイボルグが、シャシュカの肩に手を置き、会話を止める。

「テ、テイル？」

リンクもテイルの肩を叩いてみるが、完全に感動の極地に入り、呼びかけても返事が無い。

ダメだ・・・。

「おい」

「はうわ・・・」

頭を叩いても頬をつねっても、テイルの顔は輝いたままだ。

「如何しよ・・・」

僕は従姉であるリアにゆっくりと視線を向けると、毒でも飲ませば？と返されてしまう。

「おい」

ゲイボルグが声を上げ、僕がそちらを向くとあの瓶を渡された。

「さつさと帰れ・・・」

「ええ、嬢ちゃんともうちよい話、したかったんやけどなあ」

「お前・・・」

そんな事を言うシャシュカに、ゲイボルグが呆れ切った視線をおく
る。

「・・・冗談や」

「関西人の冗談は冗談じゃないんですよ」

「おお、嬢ちゃん、よお知つとるな！」

何とも言えない会話が続き、本当に敵同士なのかと疑問を抱く一同。

「はい終了」。良い子はおうちに帰りましょう」

僕はティルの腕を掴み、子供を相手にする大人のような口調でそう
言った。

「ええ〜！日本人に会える機会って今だけなのにい！」

ティルがそう言うと、

「ほれ見い、嬢ちゃんもああ言うてはるやんか」

シャシュカが笑みを浮かべて、ゲイボルグを肘で突いた。

「知るか・・・」

「薄情やお」

「お前面白いな！」

グラディウスは、変わった性格のシャシュカを気に入り、肩を叩く。

シャシュカ相手はゲイボルグも不慣れらしく、ステイレットも同情して苦笑した。

<Side ゲイボルグ>

どうもこいつはやりずらくて敵わん。

「せめて1回だけ！ね？」

向こうではティルと呼ばれていた女子が、手を合わせて司令官の弟に何かを頼み込んでいる。

「ええ！？いや、無理だから！」

グラムドリンクはあり得ないとばかりに、首を横に振っていた。

「もしかしたら良いかもしれないじゃんかあ！」

「流石に無理だろ、それは」

「もう！フロツティまで・・・！」

言い合う2人を余所に、グラムドリンクとリアファルが話し合っている。

「従姉なんだから、何とかしてよ」

「無理ね。ああなったら、納得がいくまで曲がらない性質だから」
たち

向こうの状況がよく分からないが、こちらには関係無いと考え、巨鳥に乗ろうとした。

「あ、ストップ！」

意外にも、ティルヴィングがこちらに声を張り上げて来る。

「何や嬢ちゃん、まだ何かあるんかいな」

「一太刀お願いします！」

ティルヴィングがシャシュカに頭を下げた。

「は？」

「おやおや・・・」

「何・・・だと？」

グラディウスはポカンとしており、ステイレットは面白そうに笑みを浮かべ、俺はあり得んと目の前の状況に驚愕する。

「あちゃあ・・・」

グラムドリンクはやってしまったとばかりに、額に手を当てた。

「うおう、ほんまかい！こりゃ予想外や」

シャシュカに至っては、顎に手を当てて考え込んでいる。

「あう、やっぱダメですかねえ？私も刀使えるんですけど・・・」

「おお、嬢ちゃんも使uncanいな！おっしゃ決まりや決まり、一戦やるか！」

「本当ですか！？」

事態が思わぬ方向へ進んでいく。

「ええ！？ありなの！？」

グラムドリンクも想定外だったらしく、噓・・・と呆然としていた。

ティルヴィングは緑色のゴッターで刀を造り、左脇に構える。

シャシュカは、いつでもええよと余裕の表情だ。

腕を組み、全く構える様子は無い。

まあ、いつもの事だが・・・。

「良いのかよ、こんな所で油売ってて」

グラディウスが俺にそう言ってくるが、

「何を言う。お前とて喜んでいるではないか・・・」

口ではそう言うが顔は嬉しそうだ。

どうせシャシュカの戦闘を見れる事に、喜んでいるだけだろうが・・・。

「では、参ります!」

ティルヴィングは刀を鞘から抜き放つと同時に、シャシュカに斬りつけた。

シャシュカはヒラリと避け、刀は宙を斬る。

——ヒュッ

シャシュカの着物の右裾から苦無が飛び出し、ティルヴィングに放

たれた。

——ガキイツ

器用にもそれを左手で持っていた鞘で弾き、右手の刀で再度斬りつける。

「やるねえ嬢ちゃん」

「どうも！」

シャシユカは草履のかかとかから刃を突き出させ、足を捻ってテイルヴィングに放った。

これも鞘で弾く。

「暗器ですか!？」

それを見て、テイルヴィングが意外とでも言いたげに驚き、シャシユカと一旦距離を取る。

「苦無に暗器……。シャシユカさん、忍者と違いますか？」

「さあ、どないやるなあ」

シャシユカは笑みを浮かべ、曖昧な返答を返した。

ニンジャとか言ったが、知らんな……。

種族のような者か……？

<Side テイルヴィング>

すごい・・・！

苦無や暗器まで使うなんて。

私感動！

って、感動してる場合じゃないね。

この人、何かよく分からないけど・・・師匠と重なるのは気の所為？

師匠も黒髪で刀は勿論使うけど・・・糸目じゃないし、関西弁じゃないし・・・。

でも、シャシユカさんの避け方とか・・・よく似てるんだけど。

というより、その前に！

刀を使ってこないというのが悔しいところ。

まだまだ半人前って事かなあ・・・。

私は心の中で考えながら、再びシャシユカさんに斬りつける。

これもヒラリとかわされ、苦無が飛んで来るのを鞘で弾いた。

何か・・・ワンパターン。

いやいや、これも何かの罠かも・・・！

ああ、でも・・・師匠もワンパターンの後にいきなり攻撃を――。

――ヒュンッ

「うわっ！」

いきなり苦無で斬りつけられ、思わずのけ反ったが両手を地面についてバク転する。

「あ、危な・・・！」

「おお、よおかわしたなあ」

やっぱり師匠と重なる。

・・・こうなったら！

「失礼します！」

私は一気に急接近し、シャシュカさんの左足付近目がけて刀を振った。

シャシュカさんはヒョイツと飛んで避けてみせるが、着物の裾部分が斬れる。

裾がヒラリと地面に落ち、シャシュカさんの左足に古い切り傷があ

るのを確認した。

「ああああっ!!」

私は驚いて思わず立ち止り、刀をシャシュカさんに向ける。

「ん？何や？」

キョトンとしているシャシュカさんだが、私は驚きでいっぱいだった。

「ちょ、ちよつと右肩見せてくれませんか!？」

「右肩・・・？ええよ」

シャシュカさんは着物の下の右肩を見せ、そこにも傷があるのを確認する。

「やっぱりいいっ!」

私はすでに確信していた・・・。

<Side グラムドリンク>

「やっぱりいいっ!」

テイルが驚いたように声を上げ、シャシュカを呆然と見ている。

「もしかしてもしかすると・・・師匠!？」

・・・ティル、今何とおっしゃいました？

「「はあっ!？」」

「あらら・・・」

「おやおや」

フロツティとグラディウスが同時に声を張り上げ、リアとスティレットが軽く驚いている。

「何だと・・・？」

ゲイボルグは意味不明とでも言いたげに、片眉を上げた。

「あちゃあ、ばれてしもた・・・。どないしょ？」

「知るか・・・」

シャシユカの問いに、ゲイボルグは呆れ果てて答える気にもならないようだ。

「ええ!??何で何で!師匠関西弁じゃなかったじゃないですかっ!」

「何言つてんねや、言葉なんて気いつけたら如何とでもなるさかい、問題あらへん」

「で、でもでも!普段系目じゃないし・・・!」

「それも自由に出来る事やんけ・・・」

ティルの質問にシャシュカ・・・いや師匠？は呆れていく。

「と、とにかく・・・！」

ティルは刀を鞘に納め、ズンズンッとシャシュカに歩みより、腕をガシッと掴んだ。

「な、何や？悪いけど帰らせて——」

シャシュカはティルの腕を振り払おうとするが、かなり強く、しかも言葉を遮られた。

予想外の言葉によって・・・。

「ダメ！日本の事、詳しく教えてくれるまで絶っつつ対に放しませんっ！」

ティルの言葉に、周りの空気が固まった。

「は・・・？」

それは誰の声だったのか・・・。

8 話・予想外は日常茶飯事（後書き）

待っていたのは長き説教。

それを受けるのは、果てしてどちらか・・・。

9 話：相手の裏を突け（前書き）

お久しぶりでございます。

では9話、参りましょう。

9 話：相手の裏を突け

<Side グラムドリンク>

何で・・・こうなったの？

僕は目の前の状況に後悔の念を抱き、原因を深く考え直したが見つからない。

「せやから、何で日本の事話さなあかんのや？」

「そりや勿論！私が知りたいからに決まってるじゃないですかっ！」

ティルはチョコンと正座して地面に座り、その正面にシャシュカがあぐひ胡座をかいて腰を下ろしている。

説教のような光景だが、受けているのはシャシュカのようにも見えた。

しかもティルの後ろにリアが立ち、日本の話を一緒に聞いている。

それはステイレットも同じくで、興味深いですね・・・などと頷いていた。

「何この光景・・・」

フロツティも意味が分からんでも言いたげに、大きなため息を吐いている。

「同感・・・」

僕もシャシユカの言葉に耳を傾けながら、フロツティに同意した。
すると、フロツティの所にグラディウスが歩み寄って来る。

「何だ？」

フロツティの言葉を見し、グラディウスはガシッと右腕を掴んだ。

「な、何だよ!？」

グラディウスは喚くフロツティを余所に、袖をまくる。

「・・・お前、この前の傷如何した？」

平然と行動するフロツティを不信に思ったのだろう。

前の戦闘でフロツティは右腕に傷を負ったはずだが、それが無いのを見てグラディウスは怪訝な顔をした。

「ああ、それは・・・」

言いかけたフロツティだが、ニヤリと笑みを浮かべる。

「教えねえよ」

「このガキ・・・!」

「ガキとは何だガキとは!俺は12歳だぞっ!」

「十分ガキだ！俺はお前より10も上だぞ！？」

「だから何だよっ！」

いきなり喧嘩を始める2人から、僕は距離を取る。

スタスタとゲイボルグの所まで歩み、

「連れて帰って」

一言文句を言う。

「遠慮しよう・・・」

怒っているグラディウスを静めるのが面倒と考えたのか、ゲイボルグは話し中のシャシユカ達を見ながら小さく返した。

その言葉にガクンと肩を落とし、今度は別の質問を投げかける。

「この前、兄弟の質問した訳は・・・？」

「答えられんな」

こちらの質問に即応じ、ゲイボルグは僕と視線を合わせようとしな
い。

僕は問いの答えを諦め、ため息を吐きながらしゃがみ込んだ。

勿論、ゲイボルグの隣で・・・だが。

「何故座る・・・？俺はお前の敵だろうが」

「いや、でもねえ・・・」

僕は喧嘩中の2人と、話し中の4人を見比べ困った顔をする。

如何しろと・・・？

——ガキンッ！

「・・・？」

いきなり金属音が響いた為、そちらへ視線を向ける僕とゲイボルグ。そこでは喧嘩していた2人が更にエスカレートし、剣を振り回していた。

「『喧嘩』の枠に収まってないね・・・」

「『勝負』に入っているな・・・」

僕達はその光景に半ば呆れ、ボソリと呟く。

「早く連れて帰れ・・・」

ゲイボルグがリアやフロツティ、ティルに視線を移してそう言った。

「リアは帰ると思うけど・・・ティルは無理。フロツティは・・・引っ張って帰る」

僕は立ち上がって話し中のグループに向かう。

「まだあ？」

覗き込むように尋ねると、ティルが思い切り横に首を振った。

「全然っ！後1日欲しいくらい！」

「1日い！？流石に付き合つてられへんわ・・・」

ティルの一言を聞いてシャシュカが呆れ、姿を消す。

直後ゲイボルグの隣に現れ、ほな帰るかと呟き巨鳥に飛び乗った。

は、速っ・・・！

「ああ！」

ティルが驚く中、ステイレットがグラディウスの腕を掴み、ゲイボルグと共に飛び乗る。

「ステイレット、放せ！俺あまだあのガキと決着付けてねえんだよっ！」

「何言ってるんですかあなたは・・・」

グラディウスの子供のような言い分に、ステイレットは苦笑いを浮かべた。

「師匠！まだ話は終わってませんよっ！」

「終了や終了」。強制終了はい、さいなら」

怒るテイルに意地の悪い笑みを浮かべながら、シャシユカが軽く手を振る。

巨鳥は舞い上がり、4人は遙か彼方へ姿を消した。

「リンクッ！」

「は、はい！」

テイルにいきなり大声で呼ばれた為、思わず背筋を伸ばしてしまう。

「早く帰るよ！帰って師匠を問い詰める！」

「う、うん」

テイルとその師匠の家は近所なので、すぐ尋ねる事は可能だと思うが、果たして会う事が出来るのかと不安になった。

フロツティは不満足な顔ををしていたが、剣を消して腕を組む。

「あいつ、文句だけ言って帰りやがった・・・」

などと小さく愚痴を呟いていたが、僕が呼ぶとそれも止めて集合した。

「あ、そうだテイル」

ふと思いついて、今だグチグチ呟いていたティルに声をかける。

「え、あ、何？」

自分の世界から戻って来たティルが、僕に不思議そうな顔で聞き返してきた。

「あのさ、このラケン・・・ウダーホルトだっけ？半分残しとくら、成分を調べてくれないかな？」

「調べるの？任せて！」

ティルは学者希望なだけあって、こういう事も得意だ。

僕達の中で一番賢いのかもしれない。

外見が合っていないけどね・・・。

僕は紅い粉を振りまき、アロنداイトに帰還した・・・。

<Side ティルヴィング>

リア姉の家にいた為、そこで解散となる。

—— スタスタツ

私はアロنداイトに帰るなり、リンクから受け取った小瓶をポケッ

トに突っ込み、師匠の道場へ向かった。

「師匠っ！」

——ダンッ！

思い切り道場の扉を押し開け、道場の中へ入る。

人これを‘無断侵入’と言う……。

道場の中は明かりが付けられておらず、整然としていた。

強引にスイッチを付け、次々と明かりが灯る。

「……逃げたな！」

私は道場の壁を思い切り殴り、誰もいない道場の電気を消して家に帰った。

「ただいまっ！」

少し怒り気味にそう叫ぶと、母さんが如何したの？と不思議そうに聞いてくる。

「あ、そういえばティル。師匠から伝言預かってるわよ？」

「え！？」

私は母さんの言葉に食いついた。

「何でも急に引越しが決まったらしくって、これから剣術を教えられなくなるって・・・」

母さんは悲しそうな顔をするが、私は師匠めええ・・・！と拳を握る。

ダダダッと2階上がり、部屋にこもった。

師匠の事を考えていても仕方ない為、瓶の成分を調べ始める

「ん・・・全く分かんない」

少しして気晴らしの為、大きな欠伸をしながら背伸びした。

ふと師匠の事を思い出し・・・。

「もうっ、師匠なんか知らないんだから！」

私は壁にかけてあった刀を鞘から引き抜き、部屋の中で一閃する。

これで満足する訳が無く私は家の外に出て、わらで作った人形を一刀両断した。

「テイル、夕飯いらないの？」

母さんが窓を開けて聞いてくるので、いりますいります！と慌てて答える。

刀をカチツと鞘に納め、すぐに家の中へ戻った。

空腹だったので一気に食べ終える。

「『ちそさま!』」

「早・・・」

母さんは食器を洗いながら、2階へ駆け上がる私を見て啞然としていた。

部屋に戻り、刀を元の場所に戻す。

「はああ・・・」

誰が聞いても分かるような深いため息を吐き、刀を見つめた。

この刀は師匠から貰った物・・・。

刀を鞘から引き抜き、窓から差し込む月光を反射させる。

「あれ・・・?」

刀身の根元、?^{はばき}の部分に文字が刻んであった。

今まで何回も使ってきたのに・・・気付かなかったなんて。

む・・・文字が読めない・・・。

日本の古い文字かなあ。

でも本で見た事無いけど・・・。

「ま、いつか。今度師匠にあつたら問い詰めてやるっ」

フフフと不気味な笑みを浮かべながら刀を戻し、粉の成分をまた調べ始める。

紅い粉、かぁ・・・。

紅・・・赤・・・朱？

いや、連発しても出て来ないけどね・・・？

「でもどつかで見た事があるんだよねえ・・・」

本で読んだような気もするが、読んでないような気もする。

もしかしたら誰かに聞いただけかもしれない。

『テイル、もし——たら、誰にも——』

あれ、何だろ。

今師匠の言葉で何か思い出したような気がしたけど、何だっけ？

確かぁ・・・。

『テイル、もし紅い粉見たら、誰にも言わんときいや』

「・・・・・・・・・・。やっぱり問い詰めておくんだったあっ！」

私は頭を抱えて後悔しながら、叫び散らす。

師匠は今何処にいるか分からないし・・・聞きようが・・・。

つて、あれ？

あのに何か言っただけ？

「そうだ、私が紅い粉の事を聞き返して・・・で、確か・・・」

『ん、せやなあ・・・そこに本があるんやけど・・・読む？』

師匠は道場の隣にある倉庫を指差して・・・って倉庫！

もしかしたら、何か手掛かりがあるかもしれない・・・！

私は一気に階段を駆け下り、家を飛び出した。

背後から驚いた母さんの声が聞こえたが、無視して道場の倉庫へ走る。

「え・・・？」

私は夜の青黒い夜空に、ぼんやりと紅い光が地上で灯っているのを目視した。

火事・・・！

「しかもあそこって・・・！」

火が上がっている場所は、私が目指している場所に近い。

ってか・・・その場所だし！

私は止めていた足を再び動かして、道場目指して走り出す。

——キキキッ！

「はぁ、はぁ、はぁ・・・！」

道場の前に立つが、私は呆然と燃え上がるそれを見上げていた。

耳を澄ませばサイレンのような音も聞こえてきたが、私は炎に吞まれていく倉庫を見つけ、肩を落とす。

「先越されちゃった・・・」

恐らくブイオ・アストーレとか言う組織が、先手を打ったのだろう。

倉庫内の資料を完全に燃やされた。

何本か刀もあったが、大事な物は自分の家にあるから大丈夫と考え、諦めて家に帰る。

「・・・そうだ」

私は家の前に立ち、頭を回転させた。

視線を隣の家に移す。

あの人なら、何とか調べてくれるかもしれない・・・。

私は希望を抱き、隣の家に向かった。

——ピンポーンッ

「すいませ〜ん!」

インターホンを鳴らし、中にいるであろう事を願う。

・・・返事が無い。

「いないのかぁ・・・」

ほぼ諦めかけた状態で扉の握りを回して押すと、ギィッと鈍い音を立てて開いた。

まるで古びた扉のようだが、長年訪問者がいなかった訳ではない。

っていうか私、先週来たもん。

「おじさ〜ん、何処ですか〜?」

廊下までちらかっているが、いつもの事なので気にしない。

家の中に私の声が響いていくが、これまた返事が無いので寝ている可能性が高くなってきた。

「じゃあ、あの部屋かな・・・?」

周りの扉を無視し、更に奥へ向かう。

廊下の突き当たりにあつた扉を開けて中に入ったが、思わず顔をしかめてしまった。

「相変わらず臭い・・・」

薬品の匂いに思わず鼻を押さえながら部屋に入り、ちらかっている本を避けて窓際の机へ向かう。

机に1人の男性が突つ伏して眠っていた。

「Zzzz・・・Zzzz・・・」

研究者のような白衣を纏い、眼鏡が机の上に置かれている。

男性の黒髪は乱れ、部屋も散々なちらかり様だ。

ま、いつもの事だしね。

「起きて〜」

「ん・・・？」

私が軽く揺ると、20代前後の男性が顔を上げた。

この人は研究者でもあり、その若さで教授でもあるエリクシア先生。

通称リクア先生・・・男性だよ？

名前に女性だと勘違いしそうだけど、男性でございます・・・。

「おや、ティル君じゃないか……。何か用でもあるのかい？」

眼をこすり、眼鏡をかけて不思議そうにこちらを見て来るリクア先生。

「実は……」

私はポケットから瓶を取り出し、成分を調べて欲しいと頼んでみる。

「この成分を……？構わないよ。最近暇だったからねえ」

いや、それ最近じゃなくていつもの間違いじゃない……？

「そうだね……。明日の朝にでも来てくれるかな？その頃には終わってるだろうから」

「はい」

お願いしまゝす、と任せした後、私は家に帰宅した。

明日、かあ……。

<Side シャシユカ>

「　　」

ワイが上機嫌で口笛吹いていると、隣にいたグラディウスが怪訝な

顔をしてこちらを見た。

「何か良い事でもあったのかよ・・・？」

「ん？せやねえ・・・特に何もあらへんよ」

「嘘つけ」

お、鋭いなあ。

まあ、テイルにばれんよう倉庫燃やしてっただけなんやけどな・・・。

今頃、舌巻いとるんとちやうか・・・？

粉の事、ばれんかったらええんやけどなあ。

。ワイは小さな心配を抱きながら、換気窓から月を見上げていた・・・。

9 話：相手の裏を突け（後書き）

黒雲が払われ、光の下にさらされる闇。

真実は、時に残酷な物となる・・・。

10話：知った事と目指す事（前書き）

10話、参りましょう！ 若干気分が良い

10話：知った事と目指す事

<Side テイルヴィング>

朝8時。

私は手っ取り早く朝御飯を済ませ、リクア先生の家へ向かう。

あの人、一応教授だけど日頃は家にいるんだ。

何でも今は大学の方が休学中だとか・・・。

リクア先生の家の前に立ち、インターホンに手を伸ばす。

——ピンポーンッ

・・・返事が無い。

ははぁん・・・。

さては、研究に夢中で夜通しやってました的なパターンだね。

そんでもって今頃爆睡・・・。

うん、毎度毎度の事でよろしい。

・・・私は何様だ？

勝手に1人ブツブツ呟きながら、私は家に上がり部屋へ向かった。

一応扉をノックしたが、予想通り返事が無かった為爆睡中だと確信する。

扉を開けて中へ入ると、机に突っ伏した状態でいびきをかいているリクア先生を発見。

「起きて下さい」

「ん？・・・ああ、ティル君か・・・もう朝かい？」

ノソリと起き上がり、リクア先生はカーテンを開ける。

眩しい太陽光が部屋の中に差し込み、そこら辺に積もっているほこりがよく見えた。

リクア先生は椅子に座り、私に瓶を向ける。

受け取ろうとしたが、ヒョイツと避けられた。

「意地悪しないでよ」

「意地悪じゃないよ。ティル君、これを何処で手に入れたんだい？」

いつに無く真剣な表情で、リクア先生が瓶を片手に問いかけて来る。

誤魔化す、かな・・・。

「友達から預かってるの」

別に嘘はついてないよ。

ただ細かい部分を省いただけだもん、うん。

「ふん……」

リクア先生は疑いの眼差しを向けながらも、仕方ないなと私に瓶を返してくれた。

「とりあえず研究報告と行こうか。それが如何いう物かは知らないけど、材料は何となくだが分かったよ」

リクア先生はクルリと椅子を回転させ、机に向き直り厚いノートを開く。

私が興味津々で材料を尋ねると、予想もしない言葉が返ってきた。

「グラスタの血だ」

「……え？」

リクア先生の言葉に、私は思考が止まりかける。

「グラスタの……血？ど、如何いう事なの？」

意味が分からず、聞き間違いだろうと思いつながら問い返した。

「これ以上の意味も、これ以下の意味も無いよ。材料はグラスタの血。それだけだ」

リクア先生は淡々と呟き、本を読み始める。

私は俯き少し考えた。

材料はグラスタの血・・・。

バイオ・アストーレとか言う組織は、一体何をしているの・・・？

急に寒気が走り、思わず身震いした。

「ありがとね、リクア先生。ゆっくり休んで」

バイバイと手を振り、私は扉を閉める。

突如、扉の向こうからいびきが聞こえ、驚いた事は余談であった。

私はその後すぐにリア姉の家へ向かい、リンクとフロッティも集合する。

先日のように、リア姉の部屋に集まった。

「それで、収穫は？」

単刀直入にリア姉が問いかけて来る。

私はポケットから瓶を取り出し、リンクにラケン・ウダーホルトを返した。

「1つだけ収穫あるよ。かなりでかいけど・・・」

「何だよ、早く言えって」

焦らされたフロッティが、思わず私を急かす。

「ラケン・ウダーホルトの材料は・・・グラスタの、血・・・なんだ」

私が小さな声で呟くと、しばしの沈黙が部屋を包んだ。

「「ええええええつつ!?!」」

「グラスタの、血・・・!?!」

リンクとフロッティが一齐に驚き、リア姉も眼を見開いている。

「え、何!? ブイオ・アストーレってかなりやばい組織なの!?!」

フロッティが今更頭を抱えて喚き散らしていた。

——コンコンッ

部屋の扉がノックされ、ビクツとする一同。

「リア? 何かあったの? 凄い叫び声が聞こえたんだけど・・・」

リア姉の母さんの声。

「大丈夫よ。ゲームの話だから」

さ、流石リア姉。

冷静に対応して、上手くあしらってくれた。

はぁと息を吐いて安堵する私とリンク、フロッティ。

「如何する？ 奴等、何仕出かすか分からないよ？ こんな物まで作ってるんだから・・・」

リンクは半分残った紅い粉を見ながら、腕を組んだ。

「私は止めるべきだと思うわね」

リア姉が懷から携帯小説らしき物を取り出し、口を開く。

「どして？」

フロッティが怪訝な顔をし、瓶を眺めながら聞き返した。

「グラスタの血が材料と言う事は、グラスタに血を流させているという事。つまり、グラスタを傷つけている訳よ」

「なるほどな。それは俺も許せねえ」

「にしても、何でグラスタの血が材料なんだろ？」

リンクが首を傾げてラケン・ウダーホルトを見つめる。

「あ、それならたぶんだけど・・・」

私はグラストについての書物を読んだ時の事を思い出し、内容を脳裏に浮かべた。

次々と文が蘇る。

「『グラストは神聖なる生き物なり。それらの血は力を秘め、それらの体は災厄を巻き起こす。人とは外れた存在であり、強き者は弱き者を墮とし、その上に立つであろう。強き者が勝つという定石は存在せず、勝った者が強いのである。人これを弱肉強食の世界と言う』・・・」

「相つ変わらぬ記憶力・・・」

言い終えた私に、思わず苦笑しているリンク。

「『それらの血は力を秘め――』ねえ・・・」

リア姉は納得したように頷き、本を読み始めた。

まさかその血が世界を裏表に渡れるとは、誰も思わなかったはず。

だが組織はそれを突きとめ、ラケン・ウダーホルトという魔粉を作り上げた。

「強大な組織・・・」

「え・・・？」

私の小さな呟きを、リンクが何？と聞き返す。

何でも無いと首を振った。

<Side リンク>

「止める事は決定だけど・・・今の僕達じゃ勝てないよ?」

そう。

ゲイボルグ達の腕は確かだ。

ついこの前まで武器を使った事も無い僕達じゃ、勝てっこない。

あ、テイルならシャシユカに勝てるかも・・・。

・・・無理だね。

師匠って言うてたし。

「私は短剣と弓で良いわよ」

リアが本を読みながら、自分の武器を決定する。

「俺は剣だっ」

「私、刀!」

「僕は槍だね」

フロッティとティル、僕も決まった。

けどまあ、如何してこうも相手と被るんだろ・・・。

僕もゲイボルグと同じ槍だし、フロッティも同じくグラディウスと同じ。

リアは弓でも闘えるだろうから良いけど。

ま、ティルが師匠と同じなのは当然って言えば当然だね。

同じ刀なのはしょうがない。

「奴等が何してるのかは知らねえが、今飛び込んでも勝てねえな。よおし、しばらくの間修行して、あいつ等を驚かしてやろうぜっ」

フロッティは何故かやる気満々だ。

「そうだね。私もそれで良いと思うよ」

ティルもうんと頷き、立ち上がる。

いつまで修行するかと僕が問いかけたら、リアがパタンツと本を閉じた。

「3ヶ月後、学校が長期休暇になるわ。その時まで各自修行よ。休暇に入ったら、アンダーヴェルトに乗り込む。これで如何？」

リアの提案に、僕達3人はコクリと頷く。

「そうそう、昨日ティルの師匠の道場が燃えちゃったんだよね？」

「そうだけど・・・？」

「あそこが残っていたら、修行場所に持って乞いだったのになあ・・・」

僕が惜しいように呟くと、ティルが小さく笑った。

「大丈夫。本格的に燃えたのは倉庫だけみたいだから。道場はほんの少ししか燃えてないよ」

「そうなの？」

「うん。師匠に家族がいなかったから、弟子の私に道場が受け継がれるみたいで、一応つ使えるんだ」

希望が見えてきた。

ティルが言うには、道場は燃えた壁を一部取り換えるだけなので、1週間後には使えるようになるらしい。

それまでは各自家の庭で練習するとして、それからは道場を使えば良いだろう。

「それに、確か今週から武器の授業よ」

リアが更に嬉しい情報を口にした。

「よし、さつさと力をつけるぞっ！」

「「お〜！」」

「騒がしくなるわね・・・」

フロッティの掛け声に僕とテイルが拳を突き上げ、リアは小さく笑った。

「では！武器の授業を始める！」

月曜日。

学校の1限目、武器の授業が始まった。

校庭に僕達3期間目の生徒が60人程度、全員集合し、複数の先生が周囲にポツポツと立っている。

ガトー先生にラハイグ先生、ルーフェ先生、ブリューナク先生・・・。

あ、ブナン先生とも言うね。

普段クラスが違うテイルも、今回は合同なので一緒に行動する事が出来る。

テイルが軽く手を振って来たので、それに振り返した。

「全員、自分の好きな武器を想像して、ゴッターで作り上げなさい！」

人数が多い為、ガトー先生が声を張り上げて指示する。

僕達は一度作っているし、どんな武器かも決まっていたから作るのは早かった。

「先生、終わりました！」

「俺も！」

「私もです！」

「右に同じく」

僕は槍を手に、フロツティは剣、ティルは刀、リアは腰に短剣の鞘をさして右手に弓を持っていた。

「お、ずいぶん早いな。武器を作る事が難関だと思っていたんだが・・・」

ガトー先生も眼を丸くして驚いている。

「ティルヴィング君、それは何ですか・・・？」

普段無口なラハイグ先生だが、ティルの持っている刀に興味を示した。

周りの皆も、見た事が無い剣に驚いている。

「これは刀って言う剣で、東の国で使われてた剣です」

ティルが鞘から抜き、刀を握った。

「曲がっているとは・・・珍しいですね」

ラハイグ先生はそれを見ると、満足したのか本を読み始める。

「早く武器を作りましょうねえ」

相変わらずのんびりとしているルーフェ先生が、まだ作っていない生徒達に声をかけた。

生徒達は懸命に想像し、ゴッターを形にしていく。

短剣やら剣やら槍やら・・・とにかく幾つもの武器が作られていった。

「・・・こうやって見ると、武器屋並みね」

リアが思わず呟くと、僕はそれを聞いて苦笑する。

「よし、全員作れたな。補助教員の先生にも来てもらったから、4人に1人先生が付く！それぞれ好きなグループに分かれるように！」

60人程度で4人に1人の先生って事は・・・先生は15人くらいいるのかな？

結構いたんだね、初めて知ったよ・・・。

で、勿論僕達は4人のグループを作った。

メンバーは言わずもがな。

「先生って誰だろ」

フロッティが周囲を見回し、僕達を担当する先生を探していた。

「フッフッフ、勿論私だぞお！」

ガトー先生が、背後からフロッティの頭をガシッと掴む。

「げ・・・」

フロッティは最悪だと小さく呟いたが、それを敏感に聞き取った先生がグリグリとねじった。

「何でもありませんっ！何も言ってますんっ！」

懸命に言い訳するフロッティ。

その様子に僕は苦笑し、ティルは爆笑していた。

リアはいつもの事だと考え、懷から本を取り出し読み始める。

「さあて、一緒に勉強しようじゃないか！フロッティ君？」

「は、はいっ！」

「あははははっ！もうダメっ、腹が・・・！」

先生に肩を抱かれるフロツティの後ろでは、ティルが腹を押さえて座り込んでいた。

僕はティルといういつものプラスに、苦笑している。

本当・・・何でこうなんだろ・・・。

10話：知った事と目指す事（後書き）

日頃の日常が、何事も無く経過する。

少年達は止まる事を知らない・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945x/>

魔物と術師

2011年10月29日15時13分発行